特279-422
*76W11030 *
422

講謹生先學智中田

明治天皇御製講座

第九卷

始

*4270-422

産業革命史大綱

春光一著

書叢會治明

9

田中智學先生謹講

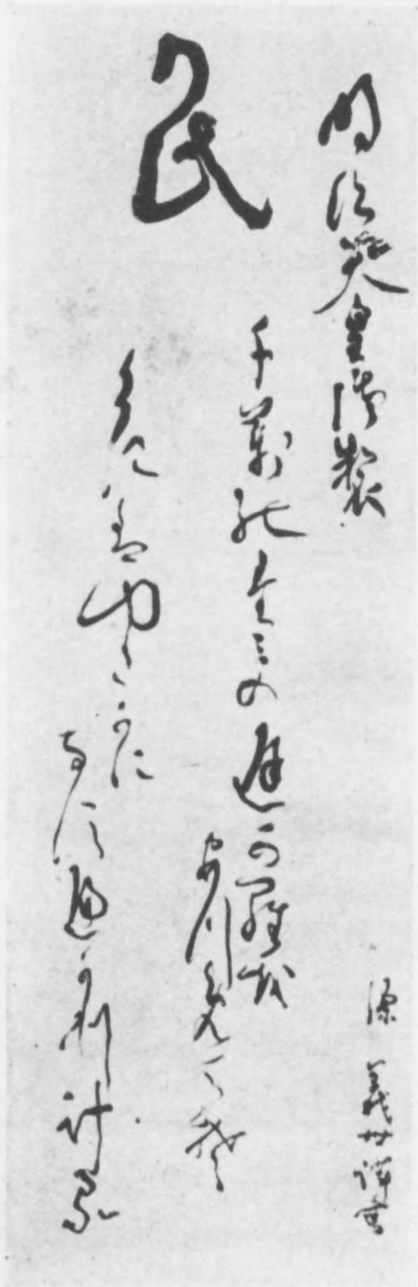
明治天皇御製講座

第九卷

明治會叢書

昭和十五年 文部省

明治天皇御製



田中智學先生拜書

76W11030

第十六講

民

千萬のたみのちからを集めてぞ
國はゆたかになすべかりける

千萬のたみのちからを集めてぞ國はゆたかになすべかりける

これは國と民との關係をお詠みになッたもので、こゝでいふ國とは國土や領土といふばかりの國ではない、即ち組織的に存在してゐるこの國家をいふのである、日本帝國ならば日本帝國といふ、この組織上の國をいふのである、國家である、その國家といふものから見る關係は、その上の民といふのは如何いふものであるか、その上の君といふのは如何いふものであるか、これは、國の成たちの根本から考へて行かなければわからぬ。

第十六講

日本といふ國は、こゝに國土がある、この國土をば所有するのについて、どういふ方法でこれを所有して行かうか、それはかうしたらよからう、こんな組織にしたらいいだらうというて出來た國ではない、それから又この或る所に人が住んでゐる、即ち民族がその中に發生してゐる、この民族といふものをば適當に整理するについて、どういふ方法か立てようといふので、この民族の個々分立になッてゐるといふのをば、

聯合とか聯盟とかいふやうな意味でもツて結合をした、それ等の申合せの爲にこゝに國家といふものを造ツたとかいふやうな意味合の國があるが、わが日本の成立は決してそんなものでない、それで、こゝに一人の豪傑があツて何等かの力をもツて領土をつくツて、その領土の經營として、こゝに自分の勢力範圍の中の人間をどツさり置いて、これを人民と名づけた、その國土は卽ちその一人の豪傑の所有に歸してあツて、その中に住んでゐるところの人民は、雇人の如く奴隷の如くにたゞその一人の豪傑たる國主そのものゝ意思の通りに動いて行く、さういふところはいくらもある。

第十六講

わが日本はさういふものでない、日本の國は民族本位でなし、領土本位でなし、その領土の所有者たるところの國主が本位でない、日本の國の成たちは、そも〳〵この國をば國家となすべく授けられた　天照大神が、卽ちこの大公至正の王道を人類にしき行ふといふ目的のために、その運動の根據地としてその場所を撰ばれたことが、日本の國のはじまりだ、それで　天孫瓊々杵尊をば、この日本にお降しになツた、これ

は他人の國をたゞ取ツたのではない、その所有者と相談の上ゆづり受けたのだ、所有者大國主命は　天照大神のこの國が入用であるといふお言葉について非常に喜んで、御總領の事代主命と相談結着の上、謹んでさういふ結構なことにお使ひ下さる譯であるならば、この國を全部差上げますからと言うて献上をした、であるからして、その大國主命のお子さんの中の、建御名方命といふお子さん一人不服をとなへた時に

第十六講

その建御名方命をば征伐するのに　天照大神の方から遣はされたところの經津主命建雷命ばかりでなく、大國主命の方の手の者も建御名方命をば聯合軍を組織して征伐した、出雲の方から逐ツて來て到頭信州諏訪の方まで追込んで行ツた、信州の諏訪へ行ツてもう力が及ばないといふ時に、遂に悔悟して屈服をした、しかし貴樣はおれを苦しめた不埒な奴であるからというて、これを頸を切ツてしまふとか、これを亡ぼすといふことはなさらない、前非後悔に及んで、私が誤解致して相すまぬといふ事さへ解ればよろしい、それでは前の罪は許してやらうというて、あの信州の諏訪を領

分としてお遣はしになッた、いまの諏訪明神といふのはそれだ。

であるから大體に於いて力をもッて取ッた國でもなし、また入用のないのに取ッたのでもない、その子孫の繁榮を圖るために人の國を取ッたものでもない、かういふ一つの人類を救濟するといふ大事業を建設するためには、日本といふ國がいゝから、この國を申し受けようといふ事をば御談判なされて、その所有者の大國主命が喜んで献上した國だ、ちやんとその談がついて、掃除をして待ッて居りますから、少しも早くどうぞお出でを願ひまするといふことになッて　天孫瓊々杵尊をお降しになッたのであるから、公明正大なものだ、さうして出來た國なんだ、であるからこれを國家の組織を立てる時にだ、その精神の通りの意味で造らなければならぬ。

そこで　神武天皇がお出ましになッて、いよ〳〵世界的活動を開くというて日向から大和へお出でになッて、橿原に都をお建てになッた、これは日向が片隅であるから大和の中央へくるといふやうな、そんな小さなことではないのだ、大和へいま行ッて

みたッて、青山四方を圍んで甚だ美なる國だなどゝいふけれども、みんな小ッぽけな山で、妹脊山だの、畝傍山だの天香具山だの、少し大きな鞄ならば這入ッてしまふやうな山だ、そんなに驚くべきやうなところではない、それを甚だ御賞美になッてわざわざ大和へお出でになッたといふのに、ちよッと行ッてみようというて來られるわけではない、日向から大和へお出でになるには大變な準備がいる、何年といふ長い年限がかゝッてゐる、それは旅行に惱んだのではない、その間に人民を指導教育してこの天上の文化をちやんと布いて、さうして片ッ端から教化を施して來た、從はざる者があッた時にはこれを征服したのであッた。

それには船もつくらなければならぬ、日向から大阪までやッてくる間、大體海なんだからして、いくら　神武天皇のやうなお偉い方だッて、泳いで來るわけには行かない、船をこしらへなければならぬ、一人や二人ではない、何百何千といふ兵を率れて行かなければならぬ、船ばかりではない、今の蒸汽船などではないから、昔の船は風

にまかせて來るのだからなか〳〵日數がかゝる、日數がかゝるとそれだけ餘計くいものがいる、兵糧がたんといる、武器もいる、武器をつくり、兵糧をつくり、船をつくり、それを訓練して、さうして兼ねてそのところの者をば指導教訓して、この王道に從はしめるやうに教育をしなければならぬ、それをやりながら來た、さうして大和へお出でになッた。

それほどの艱苦を忍んでも大和へ來なければならぬといふのは何のためだ、これはこの大和の國に　神武天皇より先きに饒速日命が天の神の仰せを受けて、さうして降ッて民族の開發に從事してゐる、これは日本の歷史において千古の疑問である、天の神は　瓊々杵尊を一方に降し、また饒速日命を一方に降し、天下の主を二人こしらへたといふならば、よッぽどどうかしてる、天に二日なく國に二王なし、國王が二人あるわけがない、何故に　瓊々杵尊をば日向に降し、饒速日命をば大和へ降したか。

これは大いに考へなければならない、瓊々杵尊には三種の神器をあたへてある、饒

速日命には十種の神寶をあたへてある、これは何の理由であるか、これをひとり御存じであッたのは　神武天皇だ、神武天皇は仰せられた、これから大和といふところへ行かう、大和には饒速日命が曾て降ッてゐる、『天の磐舟に乘ッて飛び下れる者あり蓋し饒速日か』と仰せられた、その饒速日命といふものは十種の神寶を貫ッて天の神から日本に降されてきた、何の仕事のために來たんだらう。

古來この事を一切解決しない、何のためだかさッぱり分らない、或る國學者は、神武天皇が大和へお出でになッたのは、目的があッて大和を征ッたわけではない、何處かいゝ所があるだらうとお出でになッたところが、偶然大和を得たんだといふ、けれども「日本書紀」には、大和には饒速日命が降ッたから彼處へ行かうというてお出でになッたとある、さうすると　神武天皇が、大和へ行かなければならぬ理由があッて大和へ行かうと仰しやッた、しかるに國學者の中でもいろ〳〵の說をするものがある、各々みるところが違ッてゐる、しかし、よく日本を解釋するには、日本の心で解

釋しなければならぬ、日蓮聖人はかういはれてある、『從來いろ〳〵な人が法華經を解釋するけれども、法華經の心で解釋しない、めい〳〵勝手に解釋するから、めいめい勝手の法華經が出來てしまふ』といふことをいはれた、傳敎大師は『雖讚法華經還死法華心』法華經をほめてもかへッて法華經の心を殺す、法華經の精神を得ないで、說主たる釋尊の心を得ないで、自分々々勝手な宗敎意識をもッて來て、それに當はめて法華經を自分の都合のいゝやうに解釋するから、法華經の心を殺すといふことをいッた。

第十六講

丁度日本の國家を理解しようといふには日本の國體精神を理解しなければならぬ、日本の政治家が法律を解釋するには、日本の精神によッて解釋しなければならぬ、手前等の精神がどうであらうと、かうであらうとそれが善からうが惡からうが日本に關係はない、何かの例に用ひるといふ位なことは差支へないけれども、各自われ〳〵の解釋、それを魂として入れかへられてはたまらない、西洋の文物をとッて日本の文

化をおぎなふといふことは取りかへッことをする意味ではないんだ、日本の文化をします〳〵より多く光を出さしめようといふために、外國の文化をとッて來てます〳〵みがく、日本國體といふものゝ種を育てるために、海外の文明といふものを肥料にしてさうして育てる、海外文明はこやしだ、ところが今日は西洋の文物を採るに、その根本第一義を失ッてしまッて、こやしに用ひるといふことを考へないで、それを種にしようといふ、飯の代りにこやしを喰ふやうなものだ、ちやうど今日のはさういふやうなものだ。

第十六講

よきをとりあしきをすてゝ外國におとらぬ國となすよしもがな

明治天皇は、かう仰せられてある、その意味で外國の文物をいくらでもとるがいゝとればとるほど日本國體の光りとなるんだけれども、日本の國體の精神を失ッてしまッて、それで彼地のものと日本のものと取りかへようといふならばそれは大變な騷動だ、帽子を買ッたが、どうも頭が大きく帽子が小さくて入らぬといふ場合があッたと

すれば、帽子をかへなければならぬ、帽子の方を大きくしなければならぬ、それは頭のための帽子であるんだから、さういふ場合に、どうもこれが合はないからと言うて頭をけづるわけにはいかない。

西洋の文物をとるといふ、けれども西洋の文物ばかりではない、日本の古代の文明は三韓の文明から隋唐の文明、印度の文明をも吸收して、さうしてこの日本の文化を完全に築き上げた、けれども精神は決して失はない、忠孝といふ言語は支那から來てゐる、けれども日本の忠孝は支那の忠孝をもツて來て眞似たのぢやない、忠孝といふものは日本固有の道なんだ、この忠孝の思想や説明が支那から入ツて來た、經學や隋唐の文物が整然として居ツたから、それを材料に使ツたんだ、肥料に使ツたんだ、そのことを考へないで、あはてた奴が忠孝といへば支那の教、支那の教でもツて日本の國體とするとかう考へたから、支那より偉いものはないと思ツて、丁度今の人間が西洋崇拜に傾いて日本を忘れるやうな鹽梅に、むかしの儒者などゝいふものは支那を崇

拜して無暗に支那を有難がツてゐた、どうも日本の名前では支那じみてないからというてわざ〳〵苗字を一字にして、服部元喬といふのを服元喬とやツて見たり、荻生徂徠といふやつを物の字一字にして物徂徠など〳〵、支那人じみた名前をつけてゐる、これは今のハイカラと同じことでむかしのハイカラだ、いつの世にもハイカラはある、ハイカラでいツたら、ハイカラの問屋は日本では聖德太子だらう、大ハイカラだ、その聖德太子は何といはれたかといふと、大陸の文明をもツて來て日本の固有の道を補助する、日本の道は根である、外國の文物は花の如く枝葉の如きものである、といふことをいはれた、一刀兩斷だ、それでなければならぬ、その精神でやツて行かなければならぬ。

ところが今日は、それが大きに間違ツてゐる、政治といはず法律といはず、文藝、社會、風俗、言語に至るまでも、この頃は日本固有の言語を失ツて、平氣でむやみに西洋の名前をもちひる、日本の名前を用ひてすむのを、わざ〳〵西洋の眞似をする、

そも〳〵自國の言語をむやみに輕蔑するといふことは、その國家の獨立を害するといふことを考へなければならぬ、私はむかしから自分の名刺を作るのに、歐文の文字を入れる場合には、必ず下に入れる、大抵名前の横に入ツてゐるものだ、僕は一番下に入れる、それでいゝのだ、ところが今日では大抵レツテルをみても、歐文が上で日本字が下になツてゐる、驛名もさうだつた、甚だしいのは日本字は何もないのがある、そんなあんばいに有頂天になツてしまツて、自分の國の自恃的精神、獨立的精神を失ふといふのは、これは亡國の途中にあるやうなものだ、根本の精神、國體的自覺を失ツたからいけない。

日本の君民關係といふものは、これは世界中のあらゆる經世經國の學者達が、耳の孔を掘ツてきいて民生幸福の資料としなければならぬ重大な問題であるのだ、どこの國にも例がない、日本の君民關係は日本だからそれだけ出來たのだ、どこの國も眞似は出來ない、遠慮することはない、どこの國も感心する時が今に來る、まだ鼻をつく

ことが足りない、もツと鼻をつけば世界中ととごとく日本の君民關係のやうなのが、本當の國を治めるところの道であるといふことを知る時代が來る、われ〳〵日本人はその用意に、今から準備しておいて世界中を敎へてやらなければならぬ、しかるに反對に手前の財產をうしなツてしまツて、さうして西洋人の糟粕をくらツて、後からペコペコお辭儀をして行くなんて、いかにもしみツたれた氣のきかない話だ。

これを解決するのは日本の歷史だ、日本の國を知るには、日本の歷史より外に仕方はない、日本の歷史は、世界一の立派な歷史である、世界中でもツて日本ほど歷史の立派に整ツてゐる國はない、ちやんと朝廷に史官といふ者があツて、さうして立派に國が公に認めた神代以來の歷史がちやんとある、これは何處の國にもない、或る歷史學者がその人の努力によツて書いた歷史といふのではない、國家がちやんと公に作ツた歷史だ、その歷史の劈頭に於いて　神武天皇がこの日本といふ國家を組織する、いはゆる日本帝國といふものを組織される時に、　神武天皇が御自分の發明によツて

造ツたのではなくして、　皇祖　皇宗が國を投けて、日本といふ國を建つべきやうに下地をつくられ、それに則ツて今こゝに日本の國家を組織するといふことを名乘られて宣言されたのが、即ち、　神武天皇の建國の詔勅である。

その建國の詔勅によれば、『上は則ち乾靈國を投けたまふの德に答へ、下は則ち皇孫正を養ふの心を弘める』、これが日本の國家を創建するところの大理由である、又あるひは『天業を恢弘す』と仰せられた、恢弘、大いに弘める、これを天業といふ、天の仕事といふ、天の仕事といふのは日本の國家を建てた所以だ、であるから、日本の帝王が國家を治める所以、日本の國民が國家を經營する所以、それはみな天の仕事といふことだ、その天業を恢弘する、恢弘するといふのは推弘(おしひろ)める、何處へもツて行くかといふと世界中へもツて行く、人類を救ふといふことは日本だけぢやない、日本は人類を救ふ國なんだから、あんまり人の厄介にはならない、救はれる人類は他にある、世界だ、その世界を救ふといふ爲に建ツた日本だ、推弘めなければならぬ、その

ために出來た日本、皇孫正を養ふの心を弘め、さうしてその最後の結果はどうであるかといふと、『然る後に六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩うて宇となす亦可ならずや』と仰せられてあツて、『然る後』だ、それでトゞのつまりは世界中を一つの家として了ふ、國家もへチマもない、國家などゝいふものはいらない、さうなれば國家だの社會だのといふものはなくなツてしまふ、世界は一家だ、一軒の家になツてしまふ、『六合を兼ねて以て都を開き、八紘を掩うて宇となす、亦可ならずや』これが日本建國の目的だ、すなはち日本文化ばかりでなく、世界の將來のすべての文化の根源を開いたのが日本である、さういふために出來た國なんだから日本の天子様も日本の人民も、みなそれを自分の仕事としなければならぬ、それが國家の使命だ、即ち國民の天職なのだ、その使命天職を忘れて、自分々々の考へ、自分々々の幸福のみをはからうといふことになれば、人を虐(いた)めたり、人をころばしたりして、他人に迷惑になることもかまはずに横暴な振舞をする、いま天下はさういふ如何にも卑しむべき、唾棄(だき)

すべきやうな、卑劣な精神が横溢して惱んでゐる、たゞむやみに慾張る、人間には慾といふものがついてゐる、人間から慾をとツてしまツたら脱殼のやうなものだから、慾はあツてもいゝ、大いに慾張るがいゝ、けれども、その慾は何であるかといふと、全人類と共に絶對の平和を樂しむといふ、この最後の目的を達するための慾でなければならぬ、それをこの立派な目的の方に行かないで、小さな仕事の目的、世間のくだらない享樂主義とか、自分だけの利福を得ようとか、名譽からいツても、利益からいツてもさういふ小さい汚れた目的、それを得んがために役々として世の營みをしてゐる、この相は如何にも憐れなすがたである。

第十六講

しかしそれが穩しくやツてゐるならばいゝけれども、それをなしとげようといふとのために、他人に迷惑を及ぼすことをかまはずやるようになる、人をあざむく、人を害する、横領罪だ、詐欺だ、そんなことが始終跋扈してゐる、横領だの詐欺だのは面倒だといふことで、もツと直接行動に出る、泥棒をコソ〳〵やる奴は窃盗を働く、

大威張りでやる奴は強盗だ、強盗も一人ぢや力が弱いといので、二人組三人組七人組強盗などといふのが出來てきた、あんなのがだん〳〵盛んになツて、十人組百人組といふのが出たら大變だ、この村には巡査が二人しかないから、泥棒が十人行ツたら巡査より八人多いから仕事が出來るだらうといふやうな鹽梅になツてくれれば、天下は忽ち禍亂の中に陥る。

第十六講

如何にもこの頃の新聞を讀むといふと、悪い事ばかりが出て居るから、日本人といふものは恐ろしい悪い事をする人間のやうになツてしまツた、ところで、私がみるとさうでない、今の詐欺横領などをしてゐるやうな、泥棒をするやうな人民でもその本質は決して悪くないのだ、そんな悪いことをするやうにしたのだ、教へさへよければ皆いゝ者になるんだ、それは請合だ、どうかしてそれは一寸は例外の烏が出るだらうけれども、大部分の人間が今のやうな鹽梅に變テコに悪くなツてしまふのは、政治が悪いか、教育が悪いか、社會が悪いか、新聞が悪いか、學校が悪いか、お寺が悪い

か、何か惡いものがよッてたかッて皆さうしてしまふ、殘らず氣を揃へて正しきに向ふやうにしさへすれば、否應なしに立派な人民が出來る、それは導き方が惡い、指導法が惡いからだ、長い短いの他のことは後廻しとしてだ、先決條件たる第一番のことは何だ、大抵の道學先生は、人間といふものはかういふ道を守らなければならぬ、それが人道であるとか、倫理であるとか、そんなことを言ッてゐるから、百年經ッたッても水は澄まない、それはそれに相違ないと言ッたッて、今日のこの世の中の人間はそんなことで坐りなほすやうな簡單なものでない、よくならうと思ッても、よくなれないやうな、周圍環境が惡くなッてゐるのだから仕方がない、それよりも一遍にだ、竹を割るやうに、こッちから一つ傷をつければ、ポンと末口まで割れて行くといふやうな、一刀兩斷の法でなければいかぬ、一刀兩斷の法とは何だ、汝善人になれよ、汝君子になれよと言ッて教へてゐるよりは、日本國民が日本建國の理想を了解して、國家の使命を自覺するに至ッたならば、いはゆる日本人といふものは、かういふ國家の使

命のもとに立ッてゐるところの、先天の天職を有した人民であるといふことさへ氣がつけば、別に學校やお寺でもッて善人になれ、惡人になるなと教へないでも、默ッてゐても嘘などつく人間は一人も無くなッてしまふ、今日の國家のかういふ風に紊れ狂ッて來たのは、みな建國の精神を忘れたからだ、國家の何たるを知らないでゐるからウカ〳〵と皆かうなッたんだ。

僕もかッて總理大臣の官邸に於いて國民教化の意見を大臣が尋ねたから、その時に私が言ッた、倫理だの道德だのと言ッてゴテ〳〵やッてゐるから、國民がひねくれてしまふのだ、一番早く日本人は日本人らしくなッて、日本といふ國はどういふ國で、日本人は何のために出て來たといふ、これだけを先に教へてしまへと言ふた。

小學校の教科書からしてさういふことをちッとも教へない、日本人が何のために生れて來たか、日本といふ國は何の爲に出來た國かといふこと、これは三度の飯をやめても、これだけは先に教へなければならぬ、それを徹底して教へて、國民の精神が頭

の頂邊から足の爪先まで、その國體的精神で固まッて御覽なさい、十呂盤を彈かうが、サーベルをもたうが、三味線を彈かうが、何をしようが、それがみな普通以上の力となッてあらはれてくる、それでこそ國が本當に發達する、しかるに目下の教育は、それがみな根本を失ッて枝葉も枝葉だ、殆んど根本に關係のない、どうでもいゝ事に力を入れてゐる、これ即ち國を率ゆることを誤ッたのだ、そこで國民は天子と國民と國家といふものの關係を先づ第一に知ることが先決條件、これを解釋するには、神武天皇が大和へお出でになッたといふ事柄を徹底的に知らんければならぬ。

第十六講

神武天皇の建國の御詔勅に於いては、明かに世界一の立派な意味に於いて我が日本帝國は建てるといふ事を仰せられてある、その大和に都をお建てになッたといふ理由は何であるかといふと、饒速日命が先に降ッて天の道をしく仕事の先驅をしてゐる、しかるに饒速日命の家老ともいふべき長髓彥は、神武天皇を誤解して最後迄反抗した、神武天皇は一遍この戰に於いてお敗けになッた、神武天皇を敗かす位なのだ

から餘程偉いものだ、しかるに　神武天皇は紀州の方から裏廻りをして軍を進められて、遂に大勝利を得られて大和を平定した、初め長髓彥は　神武天皇を誤解した、神武天皇が天神の孫だと言ッて名乘ッて來たのは、これは僞物である、天神の孫とは我が御主人の饒速日命である、しかるにさういふ僞名をもッて我が國を奪ひに來たのだといふ誤解のために　神武天皇に反抗した、さうすると　神武天皇の方では汝の疑ひはもッともだ、しかしながらこれを解決するについては證據がある、おれは天神の孫であるといふ證據には天神から授けられたるところのしるしがある、汝の主人も天神の孫であれば、その通りのしるしがなければならぬ、これをもッていッて合はしてみろと言ッて、天標といふ即ち天のしるし「天の羽々矢」をお渡しになッた、それを見ると饒速日命の家に傳はッてゐるものと同じものであるから、饒速日命は『これは必ず天神の孫である、わがためには本家であッて、この國の主たるものである、あくまでこれに反抗するといふことはならない』と長髓彥に仰せられたけれども、長髓彥

第十六講

はなほも疑を存し、かつ、強情我慢な男であッたから、最後まで反抗するといふ、そこで饒速日命は、已むを得ず長髓彥を誅戮して、天神より戴いた十種の神寶をもッて神武天皇の軍門に提出して降參を申し出た、即ち御子息可美眞手命をお遣はしになッて降參をなされた、さうすると、　神武天皇は、昨日まで敵味方となッて戰ッて居ッたものゝ降人、降參人、その降人をお迎へになり、長髓彥の首と十種の神寶とをお受取りになッて、その敵の大張本たるところの可美眞手命をば、直ちに國務大臣になされた、　神武天皇には道臣命等といふ立派な御譜代の大臣がある、それと同列の大臣格に御採用になッた、昨日まで敵味方で戰ッて居ッた、これは何を語ッてゐるか昨日まで反抗したのは長髓彥の誤解だ、その誤解がとけた上からいへば、誅に服した長髓彥の沒落でもッて、もうスッカリ勘定がすんで、後へ殘ッたものは饒速日命の家と、神武天皇の家との此の兩家の關係だ。

神武天皇の家には、三種の神器を天の神から授けられた、いま御代々の天子が御位

にお即きになる時に讓り渡す天下の寶たるところの鏡と璽と劍の三つだ、これは何のためであるか、即ち天下を治めるところの德を表示した劍と璽と鏡とをお授けになッたのである、なほ『この鏡を視ること猶吾を視るが如くせよ』と　天照大神は仰しやッた、いまそのお寫しが宮中にある、それは賢所にある、眞實の鏡は伊勢の大神宮に祀ッてある、代々の天子はこの鏡に向いて御自分の容貌をうつす、その容貌は直に天照大神が映ッてゐる、容貌ばかりではない、心をも映す鏡、何百何萬代の後に至ッても　天照大神の御血統は肉體の繼承ばかりではない、御精神の繼承もする、日蓮聖人はこれを解釋して、『日本の帝王となるものは　天照大神が頭に宿らなければ日本の帝王にはなれない』と仰しやッた、　御歷代のいつの代に至ッても日本の天子樣は天照大神の延長である、それで日本の天子樣を現人神と申す、神樣といッたッて、耶蘇敎の神樣ではない、これは御代々に於いて人類の最大幸福を建設するために努力せられたるところの功德莊嚴せる聖人、その御家を『我皇祖皇考乃ち神乃ち聖』と　神

武天皇が仰せられた、その神だ。

日本の神といふのは、日本の御先祖といふことである、乃ち神であり聖人であるといふ、深くこの人類を憐れんで、人類のために偉大なる光を傳へ下されて、たゞこれを原理や思想で傳へたばかりではない、道を本とする國家を組織して、その内容を事實にあらはして、さうして實物を以ッてお授けになッた聖人、そのみなもと其れを神といふ、その神の後裔なんだ、その神を生きた人間の中に道統の主として傳はッてゐるところの位を天子様、現人神といふ、人間の上にあらはれた神様といふこと、天の神といふ、かの耶蘇でいふ天の神といふのは、これは想像上で描いた神様、馬鹿に有難いやうに出來てゐる、非常に有難い、どうせこしらへるんだから遠慮なく立派にこしらへてゐる、しかし何處にゐるのかわからない、どこから出て來た神様かわからない、別に神様の歴史はない、だしぬけに突然出てわれ〳〵の頭にかぶさッてゐる、汝等はもと俺が作ッたんだといふ、迷惑な話ではないか、こちらが註文もしないのに、

さういふ神様を信じてゐる者の前には功徳があるのだらうけれども、われ〳〵の如く信じない者の前には何の効力はなく、臆病者が時計を鬼とみる、浴衣の干してあるのを幽霊だとみる、臆病でない者は何とも思はない、けれども臆病の前にはそれが立派な鬼であり幽霊である、さういふやうな神様は、いま日本の神様とは違ふ、それから迷信的に言ふ神様、かみなり様、風の神、厄病の神様、あんな神は日本の神様とは違ふ、そんな厄介な神様ではない、日本の神は人間だ、人間の中の精髄なのだ、道を行ひ義を悟り、さうして人を救ふといふ偉大なる徳を完全に成就して、常に人の上にあッて光を投げてゐるところの大勢力の神だ、それが昔の日本を開いた御先祖だ。

天照大神それを解くとあまてらすといふ、その理想は日であるから日の神といふ、なにも日本の天子様が太陽の別家だといふわけではない、別家どころではない、本家なのだ、けれども、この天の現象の中に於いて天を代表するものは日が一番であるから、そこで天象の中心たる日を以ッて理想とするので、日の神、　天照大神、日の神

の開いた國だから、日本を日の本といふ、日が天地萬物の中において、一番力があり一番明かで、世の中では一番中心となるものであるからこの日を理想とする、それがソツクリ日本の國の理想であり、國民の理想である、だから代々の天子様は、みな日の神の心を以ツて政治をなされた、日本の男をヒコといふ、何彦といふ、男だ、女のことをヒメといふ、何々姫といふ、ヒコといふのは日の子といふことだ、ヒメといふのは日の娘といふことだ、日を理想とする、それから人間をヒトといふ、ヒトといふのは日に止まるで、萬事日だ。

この日といふ理想が日本の國體を造り、日本の國體は公明正大なる大公至正の道をもツて人類を救ひ、人類をその道の中に入れようといふ事業のためにこの國を建設したといふほどの國、そんな意味合で出來た國は、世界中何處にもない、他のどの國でも人間が集まツて來て、この集まツた人間を始末するのに國家をこしらへようぢやないか、國王をこしらへて君主國にしようぢやないか、或ひは人民同士相談してやる共

和國にしようぢやないか、或ひは二三の勢力ある者にたくしてやるところの貴族政治の國にしようぢやないか、といふやうな手順で相談して出來たので、それはたゞ人間がウヨ〳〵ゐるから、その始末をつけるといふのにすぎない、それから勞働から產出する所の富を分配するのに都合のいゝやうに、何とか申合せをしようとか言ツたやうな鹽梅、たゞ富めることを以ツて人生の幸福だといふ、その幸福とは何であるかと見ると、ただ自由に喰ツたり寢たり起きたりすることを幸福と考へてゐる、それも幸福の中ではあるけれども人類の幸福といふのはそんな劣等なものではない、喰ツたり寢たり起きたり着たりしてゐることは人類ばかりではない、禽獸でもみなやツてゐる、禽獸には人間のやうな波瀾動搖がないだけ人間より餘ほど優等である、犬や猫がなにも不景氣で以ツて靑い息を吹いてゐるといふやうなことを聞いたことはない。

人間にはいろ〳〵波瀾興亡があツて、盛衰があツたりしてどうも憂へ勝ちだ、さういふやうな衣食の生活ぐらゐを人間の目的であるといへば、これはもう殆んど禽獸以

下だ、どんな立派なものを喰ツてみても、どんな立派な衣服を着て生活しても腹の中は空ッぽうだ、模様だけ綺麗だというても、人間いくら友禪縮緬の衣服を何百枚着ても鳥の孔雀など〻いふものにはとても及ばない、どんな友禪の衣服も孔雀ほど綺麗にはゆかない、最もつまらない見る度にといつは實に世界の邪魔もの〻隨一と思ふのは芋虫だが、くだらなくゴロ〳〵して歩いてゐるが、あれの身體には實にどうも手數のか〻ッた極彩色がしてある、そんな譯のものであッて、人間の幸福といふものはそんなものではない、人間の幸福といふのは天の理に從ひ道を行ッて、その高尚なる道を樂しむことの出來ること〻、それを人としての眞の安心の境涯とするといふとが眞の人間の幸福なのだ、その幸福のために國家が出來た、人類にこの幸福をつくるがために國家が出來た、さういふ國家は日本より外にない、それが日本の成立なんだ、これを振り出しに行けばい〻、しからば日本の人民といふものは何をするのが日本の人民か、即ちこの建國の精神に隨順し、その國の心の通りに行動するのでなければ日本國

民ではない。

いやしくも日本國民といふのは、たゞ日本の國に生れて日本の國に住んでゐるから日本國民だとかう解釋してはいけぬ、日本國民といふのは、日本の國に生れて日本の心、國の心をよく體して國の心の通りに行動するものを日本國民といふ、それからもう一歩進めば、日本國に生れないでも、何處の國に生れようとも、日本建國の精神を心とする人民であッたら、それが本當の日本國民だ、日本に生れたからといふ理由で胡麻化されてはならぬ、日本に生れてもロシア根性、アメリカ根性の奴がいくらもあるぢやないか、人間に生れて來ても腹の底の畜生のやうな人を人面獸心といふが、これは日本に生れても腹の底はロシア人アメリカ人だから、日面露心、日面米心だ、たとへロシアに生れようがアメリカに生れようが、日本の建國の精神を理解して、日本の國體の尊貴なることを知ッて、これを人生の日常の道に行はうと考へる者があれば千萬里を距て〻居ッても、それは眞の日本國民だ。

支那に醇親王（じゅんしんのう）といふ人があッた、支那の帝室の王子で、この人は　明治天皇を非常に崇敬なされて、世界の聖人であると言うて、常に　明治天皇をお慕ひ申して敬拜して居られた、何といふ人だッたか忘れたがアメリカ人で日本に公使か大使かで來てゐた人、それが後にアメリカへ歸住して居ッた、その人が　明治天皇の御崩御の後、御聖德を景慕して日本に來て、　明治天皇の御陵（みさゝぎ）へお詣りをした、御承知の通りあの桃山の御陵は段々が高い、石の段がどッさりある、それを先の大使だから政府でも親任待遇を以ッて案内した、さうすると、あの何百何十段ある石段を其のアメリカ人が昇るのに、一段々々づつ敬禮をして昇ッて行ッた、日本人でもそんな人は一寸ない、明治天皇の御大葬の折に電信柱の上に昇ッて見てゐた大學生がある。

げんに私が見たのでも、桃山御陵でもッて、何處か田舍から來たらしい古い洗ひざらした浴衣を着た青年二人、草鞋をはいて、さうしてあの手洗鉢の前へ來て、何か脊中へ背負ッてゐた風呂敷包を下ろした、何をするか知らん、これはいづれ水呑百姓か

何かの青年だらうと思ッて私は見て居ッた、さうすると、手水を使ッて、その汚い風呂敷包の中から取出したものを見ると、蟬の羽（は）ッぱのやうな羽織だ、その着た衣服は大てい同じ類の程度のものである、けれども蟬の羽ッぱの様な羽織でも洗ひ洒した浴衣でも、手水を使ッて、これから拜むといふ、さういふ草鞋をはいた農村の青年が羽織を出して一着に及んで、それから拜むといふことに至ッては、實に美しい心である と、私は感心して見惚（みと）れてゐた、尊い青年だと思ッて居ッた、さうするとこッちから年配四十二三の紳士だ、立派ななりをした紳士がやッて來て、御陵の前へ來て帽子も脱（と）らないでつッ立ッてゐる、巡査が來て『コラ帽子をとれ、帽子をとれ』といはれて、仕方がないからしぶ〳〵帽子をとッたが、お辭儀も何もしない、それでも顏は日本人だ、その時にこッちの方の手洗鉢の方からはさういふしがない姿をした青年がうや〳〵しく羽織を着て口をすゝいで、さうしてちやんとひざまづいて青年二人が拜んでゐる、こッちからはいづれ都會生活をした、髭などをはやした、相當教育を受けた

人であらう、立派な衣服を着て帽子をかぶッた先生が、巡査に催促されて帽子をヤットコサと脱ッた、不精々々にふくれ面をしてとッた、かういふ人間がある。

それは何によるのであるかといふと、その根本を論ずれば、その人達の悪いばかりでない、即ち國家が眞の國民の教育といふものを、日本國民としての教育といふものを加へてなかッたからさういふ人間が出來て來た、それが脱線すれば何處まで行ッてしまふか分らない、幸德秋水も虎の門事件もみなさういふところの根本を誤ッた所から、みなその禍が發生して擴がッてくるのである、實に國を治めるといふものは、その根元の心の用ひ方が大事である、　明治天皇は常にこの國民に對して、御自分みづからが國體の權化としてお立ちになッた通り、國民全體もその心で立たなければならぬといふ意味のことをば、懇篤に御指導なされた。

日本の民といふものは、君民相對(あひたい)して立つといふ相對的の民ではない、君民が一つ意味に於いてなりたッてるところの民である、天の神が、饒速日命にはこの國に降ッ

て國土を開發經營する事をお命じになッた、瓊々杵尊にはこの國に降ッて此の國を統一することをお命じになッた、一方には三種の神器を授け、一方には十種の神寶を授けた、天下に君が二人立ッたのではない、しからば饒速日命は何であるかといへば、即ちわれ〳〵日本國民の模範的行動を示すために、國民の先祖として降られたものである。

十種の神寶は何であるかといふと、これは民業を開發して、國家の力を作るところの事業そのものを指導するためにお下しになッた、であるからして、璽(たま)だの、劍だの鏡だの、それから織物だの、はちのひれ、おろちのひれ、くさ〴〵の物のひれ、ひれといふのは衣服だ、即ち國民の日常に用ふるところの、利用厚生の原料を得るべき處の民業民力の開發を、饒速日命にお命じになッた、それが天降ッて、大和の國へ先きに店を開いた、即ち天上の文化を先きに普及することに從事して居る、それであるから、大和へ行けばその中へ魂を入れゝばいゝ、であるからして、この天業を恢弘する

といふ事業は、日向の方にばかりゐては出來ないから、大和へ行かうと仰しやッておいでになッた、であるから昨日まで敵であッた饒速日命の息子の可美眞手命にお會ひになると、すぐさま國務大臣になされ、さうして天下の政治をばお行らせになッたといふ、即ち『吾汝を待つこと久し』というて、君民の提携、君民一致の關係をこゝにあらはして、先天の君と先天の民と契合して、この國を經營するといふところの御先祖の思召しを、いよ〳〵實行し、しかる後に天皇の御位にお即きになッた、さういふわけで出來たのが日本の人民なんだ、だから　神武天皇は人民のことを「大御寶」と仰しやッた、奴隷とは仰しやらない、大御寶といふのは何だといふと帝室の御用を勤めるから大御寶といふのではない、帝室と共々この日本の使命たるこの國體の道を行ふ大事な當事者であるから、人民を大御寶と仰しやッた、それを或る博士が、人民を大御寶と言ッたのは、人民を器物扱ひにしたもので甚だ不都合だ、とかういふ、何もわからぬ奴に掛ッたら何を言ッてもわからぬ、寶といふものは尊いから寶といふ、そ

れを器物扱ひだといふ、それがまア博士とか、大學教授とかいふ人間だ、世間でもッて『學者必ず間抜面』というてゐるが、これ等は正しくその實例であらう。

それは何だといふと、西洋の諸國における、人民の權利を壓迫したところから、民權の叫び自由の叫びとなッて、その上に多少の流血をみてから立憲政治といふものが出來た、かういふ西洋の實例が先天的に先入思想となッた學者には一の迷想がある、さういふ豫想によッて日本の憲法をもはめて解釋しようとする、日本の帝室もそれにはめて解釋しようとする、それだから昔から國民を虐げて居ッたとか、國民を壓迫して居ッたといふやうに考へる、國民を壓迫したのは封建時代の制度で、斬捨御免といふやうなものがあッた、それは封建時代にやッた、日本の國體に於いてそんな事はない、蘇我、藤原、源平、北條、足利、織田、豐臣、德川、これだけの約千年ばかりの間に、いはゆる中間政治といふものが出來た、天子の大御心でない、國民の本領でない、その間のものが出來た、ちやうど病氣で瘤が出來たやうなものだ、それが長い間

蟠屈して、斬捨御免のやうな事をやッて居ッた。

そこで　明治天皇は、これは日本の國體に背反したものであるから、むかしに復さうと仰しやッた、むかしの日本の通りにするといッて『舊來の陋習を破り天地の公道に基き』と仰しやッた、さうして明治二十三年に國會を開いて、人民の參政の權能を御付屬になッたといふ事は、今西洋でやッてゐるからおれの國も仕方がない、いやいやさうするとは決して仰しやらない、これは我　皇祖　皇宗の思召しである、　皇祖皇宗は人民と相提携してこの國を治めてゐたのが、中頃間違ッた病的の國狀を現出したのである、いま朕の代に及んで、人文の發達と共にこのことをば御先祖代々のしきたりを、成文成典としてこゝに帝國憲法を發布する、『大日本帝國は萬世一系の天皇之を統治す』といふ、それから人民の權利、財産等に至るまで、ちやんと成典として保護して、これを成文に登錄せられて、後戻りしないやうに我が代々の子孫はこの憲法の條章によッて國を治める、この外に出ることを許さぬ、また人民もその通りであ

る、一たび憲法を發布した以上は、君民共にこの通りの心でやらなければならぬ、とれはおれが發明したのではない、祖先代々　皇祖　皇宗の思召しの通りに日本をしたのであるぞ、かう仰せられてある。

さういふ君民の關係といふものが日本の國體、であるから日本の民といふものは、さういふ尊い天職がある、故にこの日本の民は天皇といふものを豫想して、天皇といふものゝ中に含まれて日本の民といふものは成立する、君中民あり民中君あり、民を豫想しない君はなく、從ッて君を豫想しない民はない、人民全體の中心が君なのだ、君の手足となり能力となッて働くのが民だ、切ッても切れない、これが君民一體といふ、働きからいふから君民一致といふ、根本に約するから君民一體といふ、故にいくら人民の數があッても、それは決してかまはない、日本人だからというて、みな神代の代から來た人民ばかりではない、途中から入ッて來たのもいくらもある、いはゆる先住民族　瓊々杵尊のお出でにならない前からこの國に土着して居ッた人民もいくら

もある、アイヌのやうな者もある、熊襲もある。隼人もある、出雲族もある、いろいろなものがある、それはみな王化に潤うてこの大和民族と同化してしまッてゐる、三韓から來てゐる、支那からも來てゐる、ドツサリ來てゐる、西洋人は今のところではまだ歸化が少い、何處の國の者が來ても日本に入ッては日本の國體と一致すれば、これは日本國民、その民は日本建國の理想を行ふことに就て大切な職分をもッてゐる、

故に大御寶といふ、器物扱ひをしたのではない。

佛教では佛に法に僧、この三つを三寶といふ、寶といふ字が書いてある、三寶樣、これは器物扱ひしたとはいへない、佛教が佛を器物扱ひしたとはいへない、尊いから寶といふ、三寶といふ、　神武天皇が國民を大御寶と仰しやッたのは、さういふ尊い天職があるから人民を寶と仰しやッた、寶も寶、大御寶といふ、たゞの寶ぢやない、よほどの尊貴特性のすぐれた寶であるといふので大御寶といふ、その大御寶である人民がなすところの仕事は、たゞ自分々々の食物を喰ッて自分々々樂をして、人の迷惑

などは構はぬ、結果はどうでもかまはぬ、自分さへよければいゝ、かういふ考へをもッてゐるならば寶でも何でもありはしない、そんなものを大御寶というて、大の字なんぞ使ッちや罰があたる、重大な任務があり尊貴な天職があればこそ、それを大御寶といふ、それを外國の帝王が人民を奴隷扱ひしたといふやうな例と同じに解釋しやうなどゝ思ッて、人民を器物扱ひにする、不都合だなどゝいふ事をいふ、そんな先生が大學教授だなどゝ言うて何も知らない生徒や、智慧のない子に智慧をつけて、隨分天下を亂すやうなことをする、それのみならず日本の憲法には御告文だの、勅語だの餘計なものが附いてゐるから誠にいかぬ、これは日本の憲法の瑕だ、などゝいふことを言ッてゐる奴がある、それを大學生がみな聞いて感心するかしないか知らぬが、それで教へられてゐる、そんなのが年々五百人づゝ卒業して行く、十年で五千人卒業して、これが會社の重役になッたり、新聞記者になッたり、工場の技師になッたりするのだから堪らないぢやないか。

これを思ふにつけても、　明治天皇の御製が深遠なる國體觀念から發してゐるといふことを、われ〳〵が研鑽し奉るといふことは、今日に於いては最も急務である、『ちよろづの民の力をあつめてぞ』、この『ちよろづの民』といふことは、いろ〳〵な種類、民族の種類もあれば事業の種類もある、百姓をやる者もあれば職工をやる者もある、事業家もあれば勞働者もある、學者もある、技術家もある、いろ〳〵な種類、そのいろ〳〵な種類のものを常に億兆と申す、億兆とは數限りなく多くある人民だから億兆といふ、それと同じことと、『ちよろづ』といふのは多いといふことと、數限りなくいろ〳〵あるところの人民が、めい〳〵色々の持前をもッてゐる、それにみな力がある、めい〳〵の持ッて居るところの能力は即ち力である、けれども、この力は異ッてゐる、如何に一致がいゝから、億兆一心がいゝからと言うて、國民全體みな一律に一つの事業をすることは出來ない、いろ〳〵な色彩がなければならぬ、いろ〳〵な力がなければならぬ。

『矢人豈函人よりも不仁ならんや』といふことがある、矢人といふのは矢を作る人、函人といふのは鎧を作る人、矢を作る人はどうかしてこの矢で以ッてどんな強い鎧でも貫ぬいて、一人でも多く傷つくやうにと言うて矢を作る、鎧を作る方の人は、どんな刄尖の冴えた矢でも刀でも通らないやうにと言ッて堅くこしらへ、怪我をしないやうにといッてこしらへ、矢を作る方の人は成るたけ、怪我するやうにといッて作る、けれども矢を作る人が惡人であッて、鎧を作る人が善人であるかといふと、さういふわけではない、矢を作る人がいくらお人好しだからと言ッて、人が怪我してはならぬ、死んではならないから、成たけ怪我をしないやうに人を殺めないやうにといッて矢を作ッたら矢の効はない、矢を作るものは、成たけ鋭くこしらへるがいゝ、それは即ち器の質なのだ、鎧を作るものは、成たけ矢の通らないやうに作るがいゝ、それは各々矢人は矢人の本領、函人は函人の本領がある、それでその各々の掌る所、主なるところの能力を完全に發揮する事が、即ちその職分に盡したことである、かう古人

が言ッてゐる。

いろ〳〵な持前、いろ〳〵な能力、いろ〳〵な職務、それが相集まッて、めい〳〵異ッた力がより集まッて國の力となる、『ちよろづの民の力をあつめてぞ』、ところで集めるといふことは、どういふ風にするか、どうも變ッた力は、集めやうがない、しかしこの集めるといふことには一の標準がある、集める焦點がある、そこへ持ッて行ッて集めなければ何もならない、違ッた力が違ッた力のまゝ發達してしまへば、力と力とが衝突する、これを集めるといふても集める焦點がある、それは何であるか、國といふことが焦點、國といふものゝ目的の上にみな集まッて來さへすれば、異ッた力はその異ッたまゝ、異れば異るほど力の用をなす。

『花は緑を隔てゝ愈々紅なり』、牡丹の花が美しいといふのは花の色が赤いから美しいのだ、けれどもあの花の赤い燃えんとする様な美しい花の色は、花に關係のないやうであり餘計なものであるやうな、あの緑の葉があるから花がます〳〵美しく見える

花は赤い燃えんとするやうな色を賞美するのであるからついでに葉も赤くしたらなほよからうといふわけにはいかない、花が赤くてあの牡丹の葉が赤かッたらば、誰も牡丹を賞美するものはなくなッてしまふのだ、あの葉が緑であればある程、あの花の紅がいよ〳〵よく、花が紅なればなるほどいよ〳〵葉の青いのがよし、それが相寄ッて一つの牡丹なら牡丹を賞美すべきところの點がそこに湧いてくる、その趣味調和です、その調和趣味の心、その形のない心の中に集合點がある、國民の力も亦その通りだ、めい〳〵のいろ〳〵な力がある、たとへばこゝに政黨といふものがある、この政黨に急進黨と漸進黨とあると假定する、これは正反對だ、いまの政黨は、どういふところが違ッてゐるかサッパリわからない、都合によると離れたり、都合によると一緒になッたり、色彩が明かでない、その時その時で、今度は我が政策を何としようかといふ調子でやッてゐる、それは論外だ、國家の政治は片寄ッた一つの理窟ではいけない、それと反對な理窟があッて、さうして互にどッちも粗匆のないやうに睨みッこを

やッて行く、互にあひ監視するといふやうな事のために、政黨の對立といふものは必要なんだ、であるから主義が反對してゐれば反對してゐるほどいゝ、政權の雲行によッて何時でも一緒になるといふやうな政黨では甚だ心細い、命にかけても、この主義は斷じてまげないといふやうな操持の堅固な政黨でなければいけない、この正反對の、一方は急進黨、一方は保守黨みたやうな、全然敵味方にわかれるほど變ッてゐるのがよい、その變ッて居る力が、主義は變ッてゐても目的は國家のためであるといふことに一致すれば、變れば變るほど國家のために必要であると思ふ。

國家といふことを忘れてしまッて目的はたゞ自己のためである、政黨を利用して大臣になるとか、次官になるとかいふやうな事のために、泥棒見たやうな事をやるといふ、或ひは鐵道敷設の權利を得てから何とかして懐を肥したといふやうな不埒な奴があるに至ッては、これはもう問題外で殆んど落第なんだ、けれども假りにいま政黨の氷炭相容れざる二つの敵對の主義があッて鎬(しのぎ)をけづるとしても、どッちもみな國のた

め勤王のためといふ考へがあッたならば、その國を憂へその國を護るといふ思想の上に於いては一致してゐるから、さういふ場合の政黨は、反對派の議論でも尊重して必ず靜粛にして聽かなければならぬ、もし自分等の黨派の主義が國のためよくないとわッたならば、反對黨の意見でも國のためになるならば聽かなければならぬから、自分の黨派の議論を聽く時よりも反對派が論じてゐる時には、むしろ靜粛に聽かなければならぬ、もしその議論が惡かッたならば正々堂々とこれを攻撃するといふのでなければ本當の政黨でないんだ、ところが反對黨が出てくると、まだ口を開かない内から妨害して、そこらを叩き廻すといふのだから話にならない、だからしまひには喧嘩口論喧嘩口論が嵩(かさ)ずれば椅子をほふりつけるか、拳固でなぐりあふか、どちらかだ。

もし今いふやうな工合に、異ッた力の目的が國のためであるならば必ず一致する、そこで億兆心を一にする、だから集まるといふことは、集まる場所を考へて貰はなければならぬ、たゞ無暗に集めたら、これは飴をこねたやうな鹽梅になッてしまふ、そ

れは紛雜を招くもとで何もならぬ、整理がつかない、國家といふものには國體精神といふものがあるから、國體精神の下に集まる、即ちこれを代表するものが、　天皇陛下の大御心であるからして、　天皇陛下の大御心のもとに國民全體の力がよッてくれば、その力は千萬無量、異れば異るほどよろしい、それがどッさりあるならば、これはお國の力作(はたらき)になる、かういふことになる。

第十六講

千萬のたみのちからを集めてぞ國はゆたかになすべかりける

それでこそ國が豐かになる、いま力といふことをば單に力といふが、この力といふものには凡そ三つの要件がある、永久性、擴大性、操持性この三つである、即ち永久性は、途切れないで何處までもつながッて行くといふ力、これがなかッたら駄目だ、今いゝと思ッても後にすぐなくなッてしまふやうな力ではいけない、一遍は出すけれども、出してしまッたら後は無くなッてしまふといふ力では何もならない、煙花(はなび)のやうに一遍ぎりで、玉屋アー、鍵屋アーといふ中になくなッちまふ、古人の言ッた、『一

兩の煙花ひまなき光りかな』そんな力はいけない、永久性がなければ力とはいへない、それは持續するためだ、『實祚の隆えまさんこと天壤と共に窮まりなかるべし』天壤無窮と仰しやッた、永久性がなければならぬ、それから次に擴大性、これは横に擴がる力、『天業を恢弘し天下に光宅す』と仰しやッたから、この道を弘めなければならぬ、日本だけよければいゝといふのではない、日本を榮えさせるといふことは、これは先づ別として、世界人類を救ふ世界人類を救ふといふことが世界の平和を來す、世界の平和よりも日本だけ平和であッたらいゝではないかではいかぬ、世界の平和でなければいかぬ、世界中の全體がおの〳〵その所を得なければ眞の平和は來らない、

第十六講

神武天皇は一番先に、世界人類全體の平和といふことを宣言されてある、擴大性は即ち横に擴げて行く力である、それから次には操持性、これはぐらつかないこと、その主張なり主義なりといふものを命にかけても守ることで、操の字はみさをといふ字である、グッと把持して放さない、狂はない、ぐらつかない、これが必要なんだ、今の

政黨の話ぢやないけれども、政黨には主義がある、綱領とかいふものがあッても少しも行ひはしない、都合によッてはあッちについたり、こッちについたり妥協する、どうだ一つ君に大臣の椅子をやるが我が黨に入らないか、よし〳〵といふのですぐ這入る、少しも操持性がない、その主義政策がどッちについても同じだからいゝやうなものゝ、朝に夕に變改するといふことは、甚だ國家の不幸である、それも悪い事を始終されては堪らないが、よいことには操持性がなければならぬ、この永久性と擴大性と操持性との三つが具有して居らなければ、眞の力とは言へぬ。

法華經には『是くの如き相、是くの如き性、是くの如き體、是くの如き力』といふ、如是相、如是性、如是體、如是力、體の次に力といふものがある、即ち『ちよろづの民の力』といふものは、千萬無量の民、或ひは種族の關係、或ひは職業の關係、或ひは大勢の智慧、或ひは大勢の能力、いろ〳〵ある、それがみな一つ目的の下に集まッて力となり、その力がいまの三つの要件を具備した力だ。

やはり學問にも永久性、擴大性、操持性がある、立派な事をして知識があッても立派なだけではいかない、立派な事ならばぐらつかないやうにそれを守らなければならぬ、今の學者は大てい都合によッて豹變するやうだ、旦に發して夕に改める一夜づくりのやうなことをいふ、つくる理窟はいつでも碌でもない理窟だ、また經濟方面においても何でもみな同じことだ、この三つの力といふものを持ッてゐないものは、一時榮えてもすぐぐらついてしまふ、眞理を伴はない、いやしくも眞理正義をともなふものは、かういふ力を持ッてゐなければならぬ、かういふ力を集める、その集めるについては、何處へ集めるといふことを決めて置かなければならぬ、何日の何時に何處でお目にかゝるといふその場所が決まらなかッたら仕樣がない、集める場所を決めて置かなければ力ばかり集めて來ても、たゞ無暗に力が方々へ混亂してゐるといふに過ぎない、集める場所といへば今いふ通り、『億兆心を一にして世々厥の美を濟す』と明治天皇が仰しやッた、その億兆心を一にするといふことは何處へ持ッていッて一に

するかといへば、即ち　天皇陛下の大御心を以ッて國民の心とする、國體だ、國體といふもの、建國の精神といふもので、千萬無量の民の力を皆集めて、百姓が米を作るのも國家のためと考へ、國體を莊嚴するために學者は學問をする、即ち國體の光りをあらはすためと思ッてやる。

第十六講

勞働者は腕から力を出していろ〳〵な營みをする、それはみな國家のためで我が腕にあるところの力は、即ち國家の力がおれの腕に宿ッてゐるのだと考へ、金持はその金を國家の力としなければいけない、それを自分の力と考へるから間違ふ、國家の富をおれが國家になり代ッて預かつてゐる、よッて國家になり代ッて始終監督するのである、そのよろしきを得れば、その結果はみな國の光りとなる、だから集めるといふことは雜然と集めることではない、統一する、合はせるといッてもいゝ、たゞ苟くも合せる苟合、滅茶苦茶に合せる混合といふことではない、申し合はせて集める、それを協合といふ、意味精神で一緒になる、それを合致といふ、それからもう一つ上は一

心同體、本當の一つの生命のもとに一緒になる、これを冥合又は融合といふ。

『王法佛法に冥し佛法王法に合する』といふ樣な鹽梅に、一つのものになッて了ふ、精神と身體と一つものになる、それが集める、けれども集めるに滅茶苦茶に集めるわけには行かない、よくこれとこれとは糟だからその糟は捨てゝ正味ばかりを寄せるといふ、多少の選擇を用ひなければならぬ、それから不純のまゝで集めてはいけない、撰らなければならぬ、そこで次には擣篩和合、擣いて篩ッて和して合するといふ擣篩和合、即ち民のあらゆる力を擣いて篩ッて和合する、さうしていやしくも合はせるのではない、雜然と合はせるのではない、整然たる意味のもとに合はせる、初めは統一する、綜合する、即ち綜合統一の次には同化といふことが來る、同化の次には整齊といふことが來る、統一、綜合、同化、整齊、さういふ集め方でなければならぬ、雜然として混亂して居ッてはいかぬ、民の力はどッさりある、どッさりある力を統一しなければならぬ、力と力の衝突は國に禍が起る、統一しなければいかぬ。

第十六講

琴や三味線の糸はみな違ッてゐる、太い糸もあれば細い糸もある、それでもッて音色が違ッてゐる、違ッた音色があッてそれにまた共通點がある、その共通點の律に整へて來て調子といふものを合はせる、その太い糸細い糸の調子が合はなかッた日には大抵の人は、餘りそんな音を長く聞いて居ッたら腦が惡くなッてしまふ、それを整へる、それを統一といふのだ、異ッたものゝ中から意味を取り出して一の意味を成立せしむる事が統一といふのだ、統一綜合だ、紛亂のうちにゐるものをばすべくゝる、それは同化の力がこれに加はる、民の力はいろ〳〵ある、民の心もいろ〳〵ある、けれども幾ら色々あッてもそれは差支ない、色々なければいけない、その色々が　天皇陛下の大御心といふものゝ中に、一つの日本國體といふものゝ中に一つになッて同化せらるれから、力は異ッてゐても、力の作用する意義は一つになッてあらはれる、それを整齊といふ、整へ齊へられて立派なものになる、音にしても色にしても立派な意義をなすのが整齊だ。

新聞紙などが社會を指導すると云ふことの、自分の高貴なる責任を辨へない、やはり一つの商品の如く考へて世の人の嗜好に阿諛ッて、さうして喜びさうなことを書けばいゝといふので記事を書く、だから人情の弱點に乘じて泥棒や人殺しの記事を優等材料として報道する、そこへまたラヂオなんぞが出來て、まことにどうも淫蕩劣惡なるところの唄などを毎日放送するとか、あるひは不良な講演でもするといふやうな事があッたら、これは國家の一大事、それは初めにこれを愼重にするといふ考がないからだ、即ち統一を缺いてゐる、内務省では衛生思想の宣傳をして、酒と煙草は衛生に害ありといふ事を教科書に書いてゐる、大藏省では煙草專賣局といふものをこしらへて、さうして煙草をドシ〳〵賣ッてゐる、煙草を喫めば大藏省は喜び、厚生省は顏をしかめる、酒と煙草は衛生に害ありといふ、どッちがどうだかわからない。

國を治めるといふことは、その機能が一つでなければならぬ、國民の力は個々別々に發達しても、その發達した力はおの〳〵長所に從ッて個々美を競ッても、それが集

合して國のため、國體の精神を發揮高揚するといふことの上に向ツて、その力が現れたならば、その力の結果は卽ち國が豐かになるといふことだ、それを集めるといふには、この統一、綜合、同化、整齊がないと、力が混亂して、力のために國が弱るやうになる、『國はゆたかになすべかりける』といふ、この『ゆたか』といふことは、どういふことだといふと、これは安らかといふことである、それから豐穰（ほうじやう）といツて物の足りるといふこともある、『國安く民豐かに』などと申します、足りる、豐饒、安らかといふこと、卽ちその力のあらはれた永久性と擴大性と操持性、この三つが發達して

第十六講

民族の安榮、社會の福祉、建國の使命となる。

興國の大詔に仰せられてある、日本民族（やまとみんぞく）の上に安榮、安く榮（はえ）がくるやう、それから社會の福祉、さいはひがくるやう、それから日本建國の使命を世界におし擴げる、卽ち世界の平和が建國の使命、この民族の安榮と、社會の福祉と、建國の使命と、それの持久性、擴大性、操持性、これが力の上にあらはれて持久性があるから、その平和

は退轉後戻りをしない、擴大性があるからその平和は普及する、操持性があるからその平和は安住する、こゝに於いて初めて國は豐かになる、その國の豐かになるところの根本は力を集めることにある、集めるといふことは、統一して集めること、中心に集める、中心をはづれて無暗に集まツてはいけない、中心に集まる、中心に集まれば集まツた上に新しい一つの大きい力が出てくる、個々銘々の力は、この統一性を投じた上に於いて、その力がこの統一綜合といふ上の洗練を經た上で、力はいよ〳〵新しく偉大なる無限の力となツてくる、それが國を富まし、國を安泰ならしめ、社會を安全に導いて絶對平和を來すのである。

第十六講

神武天皇の御理想の如く人類同善四海一家、世界が一軒の家になるべきものであるといふことの最後の目的、建國の大使命を果すことは、卽ちこの千萬無量の民の力を一つに集めるといふことから起るのであるから、民は卽ち國を本とし君を本として集まるといふ意味でなければならぬ、そのことを解釋するについても、人民と君と國

との關係がよく分ッて居らなければ、てん〳〵われ〳〵に行きたい方に行ッてしまふといふ事になる、今日の世の中はそんな狀態に曇らせられて居るから、民の力は本當に發達しない、發達すればめい〳〵勝手に發達してゐる、則ちその力の及ぼす行末はたゞ國に面倒をひき起し、紛亂をひき起すにすぎない、いはんや鬪爭心理を無暗に激發し、反抗思想を無暗に激成するやうになれば、ちよろづの民の力は、折角ながら皆爭ひの材料となッてしまッて、則ち現に人民の力はある、あるけれども、その力のために國は弱められてゐるといふやうな、矛盾の狀態をなしてくることになる、これみなこの力の寄せどころ、集めどころを失ッてゐるからである、かういふ意味のことをば、それとなく御教訓なされたこの御製が、卽ちこの民といふことに對する御製、明治天皇の（みそたは）鬱せらるゝところの民の力は、かういふものであるといふことを、われわれが痛切に自分の身の上、心の上に反映して、自分の力となし、處世の方針となして進むべきものであると存ずる次第である。

（第十六講了）

第十七講

對月

さま〳〵にもの思ふ夜もさやかなる
月にむかへばなぐさまれけり

本講は「月に對す」といふ御題でお詠みになッた御製である、花鳥風月といッて、宇宙萬物に對する情味とか趣味とかいふ詩の題材となるものに、花とか月とかいふものがまづ主なるものである、故に和漢古今、月に對するいろ〳〵な詩は數多く、別してこの月は春も月があり、秋も月があり、夏もある、おの〳〵季節によッて月の趣きが違ふ、それは月が違ふのでなくて、その季節で環境の種々のものによッて、意味が違ッてくる、それから一つは季節環境に對するこちらの心が違ふ。

春は何となく氣が浮き立つ、草木も芽生え、花も咲くといふ、丁度人間の心もその通りなので陽氣である、陽氣な心をもッて月に對すれば、月が何となく賑やかに感ずる、別して春には朧(おぼろ)の月を賞するといふことがある、朧などゝいふことは、どちらかといふと月としてはよくないわけだけれども、しかしながら、特に春の朧の月を賞するといふことは、何となくそこに含蓄があッて、趣きが深いといふやうな點から『朧月夜に如(し)くものぞなき』などゝいふ。

夏は實は月の季節ではないけれども、これは暑い時だもんだから、月のやうな澄みわたッた涼やかなものをみると、清涼の氣を感ずる、春は非常に溫和な、あた〻か味のある潤ひのある情緒があるに對して、夏はこちらが暑いのであるから月を見ると涼しく感ずる、けれども、これは秋が月の時節としてあるものだから、むかしから春の月、秋の月に對して夏の月を半分に踏んである、古人の句にも『春宵一刻價千金、花に清香有り月に陰有り』といふのがある、春の夜の一刻は價千金だといふ、さういふ相場をたてた、それぢや夏の晩はどうだといふと、夏の晩は半値で五百兩、なんで半値であるかといへば、蚤と蚊を半値にみて五百兩といふ。

けれども先づ古今月といへば多く秋、それは何故かといふと、秋は草木がすでに凋落しか〻ッて風も浮きたつやうな氣分がない、しまる、身に泌みわたるといふ、だから秋の風を金風といふ、木火土金水、昔の人は五行でいふと秋を金とする、金は冷やかだ、しまるといふ、身に泌みわたるといふ、この秋の風は心に緊張を覺える、『故郷

母あり秋風の涙、前路人無し夜雨の魂』といふ源爲憲の詩があるが、故郷に母を殘して旅立つといへば、秋だらうが、夏だらうが、その寂しいといふ心は同じであるけれども、これを秋について言はないと、その情があり〳〵と出ない、『故郷母あり春風の涙』ではどうもいけない、故郷母あり秋風の涙……『わが身には秋風寒し親二人』といふ句もある、身に泌みわたる秋の風に感じて故郷が思ひ出される、故郷に殘した年老ッた兩親はどうしてゐるだらうといふやうなことが、どうしても考へられがちなんだ、『月見れば千々に物とそ悲しけれ我が身一つの秋にはあらねど』と古人も言ッてある。

まッたく此の月といふものは萬物の騷擾をしづめて、如何にも靜寂な氣分あらしむるもので、私はよく海上で月を見るが大層賑やかに感ずる、三保の松原などで月の晩に、あるひは舟を浮べたり、林中を逍遙したりして月をみてをると、如何にも月が賑やかに見える、しかしながら、その賑やかのなかにいかにも月の緊ッた氣分が、萬里

の情趣をよび起すといふやうな感じがある、これを深山幽谷のなかにその月を見るといふ時には特にその感が深い。

古來『古關の月』といツて關所の跡で見る月は、寂しさが一しほ深いとされてゐる、それは關所といふものが旅情をそゝる、旅の心をそゝる、旅はいろ〳〵のあはれをのせて往來するものである、さういふところから、まア關所も今なくなツて居ツて昔あツた關所の跡などゝいふ、その何か門礎でも遺ツてゐるといふやうな時に、その古關の月を賞する、いづれ關所のあるところは多く山だから非常に寂しいものだ、かういふやうに、月は多くいろ〳〵な人の情緒をそゝるといふ、即ちあはれを感ずるといふ對境になりやすいのである、本講の御製はやはり秋の歌である、けれども　明治天皇がこの「對月」といふ御題をもツてお詠みになツたこの御製は、單にたゞあはれといふばかりでない、偉大なる哲學、思想、文藝の綜合した大感想を盛りこまれた御教訓である、「月に對す」といふ、月そのものを詠むのではない、月に對するところ

の心持、心ばへを詠む、

さま〴〵にもの思ふ夜もさやかなる月にむかへばなぐさまれけり

御製は何等別にむづかしいことはない、いろ〳〵ものを思ツてくよ〳〵してゐる時でも、空に澄みわたり冴えわたツた月を見れば、その月は心の悶々の情を拂ツて、非常になぐさめられる、月になぐさめられるといふ、かういふ御感想をお詠みになツた、しかしこの御製のお言葉から、例によツて例のごとく、國體學的に思想的に解剖を試みて聖意のあるところを伺ひますれば、われ等の日常生活において最も痛切に心の落着くところを知ることが出來る。

まづ『さま〴〵にもの思ふ夜』といふ、さま〴〵にもの思ふ夜といふことは、どういふ事であるか、世の中は何でも自分の考へてゐる通りにゆけば簡單だけれども、自分の考へてゐる事をやツてゐて、その考へ通り當人がやツてゆく上に、自分から齟齬することが幾らも出來る、まして相手方のあることだといふと、こちらがさう思ツて

も、向うがさうは思はない、こッちもさう思ひ、向うもさう思ッてゐても、何か事柄の途中から支障が生じて、さう思ッてゐる通りにゆかない事が出來る、それが何かあまり問題にならないすら〳〵した事ならば、舌打の一つもすればすんでしまふけれども、そいつが妙にこんがらかッてくると其れからいろ〳〵な事件が起ッてくる、一つ間違へばすぐにそれに乘じてごた〳〵が起ッてくる、紛紜が一旦起るといふと、その起ッた事柄を處置するために又新しい用が殖えてくる、それからそれへと枝と葉がさかえて、世の中の姿はわづらはしくなる、そのわづらはしくなる事柄のなかには、こちらでその荷が背負ひきれないで、心の惱みになることがいくらもある、それは御同樣みな經驗がある。

『三度炊く飯さへ硬く軟かし思ふ儘にはならぬ世の中』といふことをいふ、飯などといふものは、三百六十五日年百年中炊いてゐるのだから同じやうにゆきさうだけれども、同じ人が炊いても、やはり硬かッたり軟かすぎたり工合よくはゆかないものだ、

同じ水加減で、同じ噴き加減にして、同じ人が炊いても、どうもうまくゆかないといふやうなもので、世の中のことはみなさういふものだといふ『思ふ儘にはならぬ世の中』、自分が自から自分でいたしてすら、あらかじめ測り知るべからざる間違ひを生ずる事がある、それで、間違ひと早く氣がつけばいゝけれども、奇態にその間違ひは、いよ〳〵鼻をつくまで間違ひといふことを知らずにやッて了ふのだ、それだから事件が大きくなる、火事だッて疊を燃えぬいた時ぐらゐならば、皆んなよッてたかッてすぐに消してしまふけれども、何しろ緣の下から起ッて屋根まで燃え移ッて了ッてから目がさめたのでは、どうしてもポンプの厄介にならなければならない、それも一軒を燒いただけですめばいゝけれども、近所合壁をさわがせる、またさわがずにゐられない、うッちやッて置けばどん〳〵燃えてゆくんだから、向う三軒兩隣りどころか、うッちやッて置けば風向きの惡い時には江戸中を燒いてしまふ、さうすると、どこの馬の骨かわけのわからぬ奴が粗匆して過ッて火を出したために、まるッきり無關係の隣

區隣町の者までもさわぎ廻らなければならぬといふ、方々へ火が飛んでゆく、そこで事柄が大きくなる、さういふ相(ナガタ)が世の中である、だから初めを慎む、その機微を慎むといふことが何の事にも大切なんだけれども、どうもウカ〳〵やる。

一例をあげると、ラヂオがあれが初め出來るときに、ラヂオをいよ〳〵やるのならば、文部大臣と内務大臣が協議をとげ、それから遞信大臣にもすツかり協議をとげてさうして政府當局が腹を一つに決めて、それから放送局にしツかりと統一した方針を決めさせ、さうして講演をするのならば、講演はこれ〳〵の範圍のもの、國家のために積極的に有益なことを聽かせるなら、それは結構だけれども、そこまでゆかないでも、消極的に害にならない範圍にとゞめる、ちようど政府が賣藥を許すのに、賣藥は効かなくてもいゝ、賣る方ぢや効く方がいゝが、實は政府は賣藥は効かない事を主とする、効かれては困る、害にならないといふ範圍で毒にも藥にもならないものを歡迎する、けれども賣る方ではこれは毒にも藥にもなりませんといふては賣れぬから、そ

れは効くやうにいふけれども、その實は効き過ぎるといけないんだ、なるたけ効かないやうに〳〵といふ處法を以ツてすると内務省がこれを許すといふ、その筆法だ、その筆法で、この講演放送は毒にも藥にもならない——なるべく藥になる方がいゝけれども——その範圍をきめる、それは甚だ干渉がましいやうであるけれど、國家といふものは、さういふ風に世話を燒かなければいかぬはずのものだ。

世話を燒くのが政府の責任なんだ、政府は世話人なんだ、その世話人が世話をしないで月給ばかりとツてはいけない、ラヂオなどゝいふものは、打ツちやツて置けば、これがために國が亡びるといふ危機を藏してゐるものだといふことを、私はその初めに言ツておいた、それからまた演藝放送もよいが、それはなるべくは高等の藝術を家庭に普及するといふ方針でなくてはいかぬ、ラヂオによツて高等藝術を普及するといふことを爲政者は考へなくちやならぬ、下等な藝術といふものはたとへ娯樂としてもそれは下等な娯樂だ、下等な娯樂を人に聽かして置くといふことは、その人の情操が

だん〳〵墮落する、その情操の墮落が積り積ッて國家の墮落破壞のもと〻なるんだから、これはよほど注意しなければならぬ。

今日の人情風俗を打ち壞したのは大抵劣惡な芝居だの、活動寫眞だのといふやうなものが與かッて力がある、それだけで澤山なところへもッて行ッて、毎日々々くる新聞がみな泥棒の提灯持ちしたやうなことをやりたがッてゐる、もうこの活動寫眞や新聞だけでかなり壞されてゐる、そこへラヂオといふのが、何等無方針無選擇でもッて、誰でもかまはない、藝人でさへあればい〻といふ鹽梅でやッて、その上また演藝の題目に就いても一向擇ばない、さうしてその劣惡な藝術が家庭に入ッて來て、何か新内の口說の眞似だのをやる、甚しきに至ッては何か人を絞め殺すラヂオをやる、聽いたものが慄然としたとかいふ、可なり實物の絞め殺しや斬殺の實話で、よほど世の中は物騷になッて困ッてゐるところへ、ラヂオまで人を絞め殺す音を聽かせるといふに至ッては、實にどうも驚かざるを得ぬ、さういふやうな事柄をだ、これを無關心で

うッかりしてゐる間に、家庭に心あるものをして眉をひそめしめるやうな劣等な演藝が飛び込んでくる、或ひはそれを共鳴して聽いてゐるやうなことのために、だん〳〵情操の墮落するやうなものが矢繼早に毎日々々來るといふことは、これは棄て置き難い問題であッて、講演に不良な講演があッたり、演藝に不良なものがあッたりすれば、ラヂオによッてこの世は壞されてしまふ、これはやる始めに考へなければならぬ筈なんだ。

このラヂオによッて高級藝術をドシ〳〵家庭に注入する、立派な講演が期せずして家庭にゆきわたッてゆく、『無量の珍寶求めざるに自ら得たり』といふやうな鹽梅になッて、これによッて國家の風教は改善せられ、民心は向上するやうにもなる、さういふやうにあらゆる天地間のものを利用するのが政治なんだ、物をよくするのが政治なんだ、何處の田舍へ行ッても、ラヂオがいま掛ッてゐる、知らぬ間に國家の風教を左右するといふ、かういふ潛んだ大いなる力がある、それを迂ッかりしてゐれば、恰度

火が緣の下に廻ッたのを放ッて置いたやうな形になる、まことに危險なものである、だから初めにものは愼まなければならぬといふことはそこである、國家の大、政治の大はいふに及ばぬことである。個人家庭の小に至るまでも、みな『愼しむこと機微に在り』というて愼みは最初にある。

第十七講

ラヂオばかりではない、何でもさうだ、芝居であらうが、活動寫眞であらうが、寄席であらうが、新聞であらうが、議會など〻いふものがその中の大關だけれども、學校では生徒が先生を擲つ、あらゆる社會現象が皆さういふ事になッてゐる、だからだん〳〵子供も惡くなる、大人も惡くなる、皆惡くなる、みな共に惡くなる、惡くしようと思ッてゐるのではない、善くしようと思ッてゐるが知らず識らずに惡くなる。

あの電車の音たけでも餘ほどわるくなる、人間といふものは、あ〻いふ音を聞いてゐればいかんものだ、それを平氣でゐる、乘ッてゐるものも平氣なら、乘せる方も平氣だ、さういふものを造る人間が、音がないやうに、或ひは人間に害のない音を、こ

れを何とか考へることをしないで、たゞ乘せて走ッてあるけばいゝと考へてやッてゐる、足を二本づゝ持ッた人間が、何もあんなものゝ厄介にならないでもいゝ、只問題は少し遲く行くか速く行くかといふことで、そこに氣がつかない、人間をぶち壞すことに氣が付かない、たゞ便利々々といふ、便利は人間の便利でなければならぬ、便利はよくても、その便利が人間そのものゝ土臺を壞してしまふやうでは何もならぬ、さうして、たゞ速く行ッたらそれでいゝ、それで以ッて文化だの文明だのといふ、誠に情ないことだ。

第十七講

そんな鹽梅で世の中がこんがらかッてゐるから、そのこんがらかッた世の中にゐればどんな豪傑でも大膽でも、少しはみだれる、そのみだれることによッて混亂をひき起す、これが日常生活の上にもくれば、思想の上にもくるし、或ひは外來の誘因として、不景氣なんといふことが出てくるし、さま〳〵に心をかき亂す、即ち社會相の混亂に、或ひは政治の不徹底に、或ひは教育の不徹底に、情實に、こんないろ〳〵な

事柄のために、どんな者でも一點の憂ひがない、安全な地位に立ッてゐるといふ者はない。

何人にもきッと憂ひがあるに違ひない、この時にあたッて心が安らかで何の憂へるところのないといふことは、これは精神の麻痺した者か低能兒であらう、もし多少でも考へがあるものは、かういふ複雑な世の中には何かと物思ひが多い、天下に憂ひのないといふことはない、天下の憂ひを少くするといふことが政治なんだ、佛敎では吾等の住んでゐる世界を娑婆世界といふ。

娑婆世界といふ言葉は、忍土（にんど）といふことである、忍ぶ國といふことだ、或ひは缺減ともいふ、缺はかける、減はへる、卽ち娑婆といふ國は物事が自由にならない、萬事缺點勝ちである、であるから滿足十分といふことはとても出來ない、我慢しなければゐられない、といふのでこれを娑婆といふ、忍土といふ、缺減の世界といふ、いま國家としてもさうだ、國家は國家の仕事を行ッて、初めてたのみにもなる、そのまゝにし

て置けば憂ひの綜合體だ、といふのは何だといふと、人間は憂ひをもッてゐる、憂ひをもッてゐる人間が寄り集まッて集團をなしてゐるから、そのまゝ放ッて置けば、ほうりッ放して置けば、只憂へと憂へとの集團に終ッてしまふ、そこでその憂ひを掃蕩し解決して、これに安心をあたへるといふ爲に政治といふものが初めて有効である。

則ち『天下の憂ひに先だッて憂へ 天下の樂しみに後れて樂しむ』、眞の爲政者は天下の憂ひに先だッて憂へ、人がそれ程に感じてゐない前から、なり代ッて先に憂へてやッて世の中を自分の身に引受けて、人に憂へなからしめるやうにする、さうして樂しみをあたへる、人に樂しみをあたへて然る後に自分は一番後で樂しむといふ、天下の憂ひに先立ッて憂へ天下の樂しみに後れて樂しむ、大名が昔こしらへた庭に後樂園といふのがある、小石川にもあるし備前の岡山にもある、いはゆるあんな大きな庭をこしらへて豪奢を競ッて、大名があの中で宴遊娛樂をしてゐる、樂しんでゐるといふ事が、どうも人民に先立ッて樂しんだといふてはちよッと申譯がないから看板を塗り

かへて後れて樂しむとかいふ、ナンの實は後れて樂しんでゐない、先だッて樂しんでゐるのだけれどもマアさういふやうなものだ。

『人生字を識る、憂患の始め』といふ、何も知らないでゐれば心配などゝいふことも知らずにしまふ、慾ッか文字を知り、義理を知り、學問をしたために、世の中のことがわかッて、さうして、いはゆる天下の憂ひを以ッて我が憂へとなすやうになッて人の知らない苦勞をした、けれども、これは佛敎で申せばそれが菩薩行である、大慈大悲の誓願力を以ッて一切の人の苦しみに代るといふ、あなたは私共の苦しみに代ッて下さるといふけれども、私は別に苦しみをもッて居りません、どんなものが苦しみだか知らないといふ、日出でゝ耕し日入ッて憩ふ、暑くなく寒くなく、三度の飯を喰ッて、無事安穩に世を送ッてゐるから何も自分には苦しみはない、かう思ッてゐる、然るに菩薩はわれ〳〵に苦しみがあるから、その苦しみになり代ッて自分が先に苦しんでやッて救はうといふ、苦しみの當人はそれを知らないでゐて苦しみはないとして

ゐる、それを菩薩曰く、自分の苦しみさへも知らずにゐる程にお目出度いから、如何にもよけいあはれだ、これはお經の中にもある。

子供が火の中で遊んでゐるといふと、こりや大變だ、今に燒け死んでしまふから、早く出て來なさいといふけれども、子供はなんだか遊びに耽ッてゐて出て來ない、今この家は燒けてしまふ、今に火がお前たちの身體に廻るから出て來いといッて聞かしても子供はそのことに一向頓着しないで、何か面白く友達と遊んゐることに耽ッてゐる、まさに猛火四面をつゝんで危害身に及ばんとするときに、止むことを得ずして方便をもッて子供を引き出したといふ、お經に譬へがある、その子供の情操を說いて、『何ものかこれ火、何ものかこれ家』といふことを知らぬ、子供の心にはどんなものが火だか、どんなものが家といふことを知らない、さうして嘻々として戲れ樂しんでゐる、しかれども、もうその子供を燒き殺すべき火は身邊に廻り來ッてゐる、この危險の中に居ッて此の危險を知らずにゐるといふことは、これは燒き殺す火の危險より

も一層危險である、『人生字を識る憂患の始め』と云ふ、ものゝ道理を知ッたものは他人の分までも餘計なお世話のやうだが、その心配をしてやらなければならぬ、しかれども、これは世を濟ひ國を護るといふ大いなる慈悲誓願のもとからみて、その苦しみを拂ひのけて、退轉しないところの、後戻りしないところの安樂境を建設して、多くのものをその安全の地へ導いてやらうといふことは、これは大慈大悲の心が本になッて起る誓願である。

さうすると、菩薩といふものは、さういふ慈悲といふものがあり、さういふ誓願があッて、まアちょッと言ッてみれば人を救ふことが道樂でもあるやうにみえる、道樂であるといふことはそれは菩薩の勝手である、こちらの苦しむのはこッちの勝手で、それを救ふのはそッちの勝手なんだから、何も感謝する必要はないといふやうなことになるかもしれぬ、そこが大變大切なところだ、如何にも道樂のやうだ、物好きのやうだ、けれども、この道樂物好きは、それはその菩薩の特殊なる感情や好みによッて

來るものではない、法界は同一體であるといふ大安心から出て來た、一切萬物もと同格一體のものである、人の苦しみは我の苦しみである、よッてこれを打棄ッておくわけにゆかない、自分として打棄ッておけない、道樂としてやるのではない、打棄ッておけない、これが一念三千の道理から出る增上緣の願業である、日蓮聖人が『命を棄てゝ天下を諫め、流罪死罪に遭ッて、日本六十六個國、日蓮五尺の身の置き所なし』といふ程の迫害危難に遭ッて、尋常のものであッたならば、もう身體が粉碎されてしまふ程の憂艱難をうけた、つらいことだ、それは命をまとにかけて、三度の諫めをした、即ち命にのしをつけて、國を護る、死身弘法の天下の諫めを三度、その三度の諫めをば好んでこれを持續した、『余に三度の功名あり』と宣して、文應元年の立正安國論から文永十年四月八日の鎌倉殿中最後の諫言まで、この三度の諫めといふことをば釋迦如來のたましひ我身に入りかはらせ給ひけるによッて、この諫めはなし得た、この心は自分の心でない、すなはち天地法界は本これ一體の本佛の境界といふものであ

る、同一體のものである、かるが故に同一體のものが本佛の境界に背反した違逆の境に立ッてゐるといふことは、如何ともみるに忍びないことである、よッてこれを元にかへして『我此土安穩天人常充滿』の境界に引戻さうといふ仕事は、道樂でも義務でもない、即ち自分の本領である、自受法樂の境界である、釋迦如來の魂が我が身に入り代ッて、凡夫の日蓮に釋迦如來の魂が入り代ッてさうして即ち佛の仕事をば行ふ、さうして國土を安樂の境界にしようといふことは、一念三千といふ法門を實地に行ッたのであるといふ、日蓮聖人でなくても、佛でなくても、天下國家を治める政治家といふものは大なり小なりその心持がなければならない、俸給を貰ふから、その俸給に對する義務として政治を執るといッたやうな料簡では、國の重荷を背負ッて立つといふ眞の責任がない、交換問題だ、俸給との交換問題だ、さういふさもしい料簡で政治をとッたり議員になッたりしてゐるといふやうな低級な考へでこの世の中を治めてゐては、未來永劫この國は眞の安住地點を現はし得ることは出來ない、少くも國家の重

きを以ッて自分の仕事と考へなければならぬ。

むかしの大臣といふものは、一たび大臣になり宰相の位に昇るといふと、脛の毛がはえないといふ、脛に毛が生えないといふのは何だといふと、いそがしい、國事に鞅掌していそがしいから、むやみにそこらを歩き廻ッてゐるから、毛が擦り切れてしまッて脛に毛が生えないといふ、かつての大臣とか政務次官とかいふものは遲く出て來て、煙草をのんで早く歸ッてしまふ、美衣美食に飽いてのさばをこいてゐる、そこでわたしは『政治は待合、議員は妥協、晴れの議場はなぐり合ひ』、かういふ都々逸をこしらへた、待合で政治をやッてゐる、ビールを飲みながら政治を議してゐる、脛の毛が生えるはえぬの騒ぎではない。

さういふ無責任な狀態が、上の好むところ下これに從ふだから、車掌も運轉手も居眠りをするやうになる、だから電車が堀に落ッこちたり、汽車が衝突したり、だんだん原因を調べると運轉手が居眠りをした、これは天下の大膽といふことに於いてこの

くらゐ大膽はない、あれを運轉する者が居眠りをしたといふ、よほど豪傑にあらずんば出來ないことだ、さういふ小さい裾の方をとがめるまでもない、だいたい國がそもそもそんな風になッたといふことは、政治の何たることを深く考へないで、國家の政治に統一がない、中心がない、徹底を缺いてゐる、よッて紛亂をおこす、この紛亂が因となッてもろ〳〵の惱みを生ずる、それが小さく個人でいへば煩悶になる、國家でいへば擾亂となる、氣がつかずにゐて、心配すべき事も心配しない程にうつかりしてゐるといふ、如何にもあはれな、うつけさ、ます〳〵もッて寒心にたへない譯だ。

いさゝか己れに歸り、本に歸ッて考へるといふ、その紛雜の中にも、人には少し靜思する時がなければならぬ、ものを靜かに考へて見る時がなくちやならぬ、朝起きるからいろ〳〵な新聞でもッて精神を擾亂せられ、戸外へ出れば電車の音がする、歩けばいろ〳〵な自轉車がくる、その上自動車とかオートバイだとかいふものが飛んでくる、ウッカリ歩けやしない、後からも前からも横からも來るんだからウカ〳〵出來ない、あの電車、自動車、オートバイ、自轉車、トラックといふもの〻中に包圍されてゐるだけでも人間の精神はへんてこになる、憐れなものだと、私はいつでも表を通るときに思ふ。

何の因果で人間はこんなに墮落したかと思ふが、みんなは墮落と思ッてゐない、いい氣になッてゐる、い〻氣になッてゐるといふことがなほさら憫然なものだとかうなッてくる、この音の騷々しい、事件の多い、用の多い、心の亂れることの多い世の中に、あア仕事も終ッて、電車の音も遠のいて、新聞もこなくなッて、夕刊なんぞといふ奴―夕刊なんぞといふ奴が大きな字でもッて何とか人殺しとか、何人斬りとか、何とか書いてガラ〳〵やるが、あんなものが一通り過ぎ去ッてしまッて、十二時過ぎでもあらうかナ、少し靜かになッて人間の世の中になり掛ッて來たその時に、つく〴〵と考へてみる、まア實にどうも何といふ世の中であらう、その中に處してゐる自分といふものは、どうしてこれを切拔けたらよからうかといふやうなことをば、森と人鎭

まッてひそかに考へる、思はずにゐればいッそ何でもないが、思ひはじむれば千々に心がみだれてきて、懊惱煩悶をするやうな事がらが累々として、前後左右に犇々と身に迫ッてくる。

この社會の亂れた態、自己の生活に對する面倒晦澁は、法律は周到綿密といふけれども、これはどッちかといふと複雜で、辯護士でもかけ出しの辯護士には一寸わからない、索引がなくては分らない、それでこれが法律の第何條によッてどうするとか、その第何條でどうとかするのには人間一人では納まらない、十人も呼ばれて、それで事件がこんがらかッてくる、そんなことで中々餘計なことに手數がかゝる、所詮死んでも追つかない面倒な世の中、その面倒な世の中をまた理窟で面倒にする、國家でも學者といふやうな閑人があッて、さうしていろ〳〵突つかなくてもいゝ事を下らなくつッついてさうして面倒な事件をこしらへる、今日の學者なんてものは世の中を治めるといふやうなことは一向考へない、世の中を面倒にして攪亂すやうな屁理窟を日夜

に製造したり、發表したりするが多くは西洋の直譯だ、その直譯も模倣だ、そいつもよく嚙み締めて味はッて知ッたわけではない、猿の人眞似のやうな鹽梅に、無暗に眞似をしてそれを新知識と名付けて可哀いさうに無垢清淨の青年にいろ〳〵な惡いことを敎へる、青年は正直だからそれを聞いて、先生の言ふことが眞實だらうと思うて、それで日夜惡思想を宣傳する、大學などの高等學府でさういふやうなことを敎へる、電車の音と新聞だけでもい〻加減壞されてゐる、そこへ又どうもいろ〳〵な學者が、ロクでもない屁理窟をこしらへては智慧のない子に智慧をつけて、さうして青年共はその煽動に乘ッて何々主義研究などを大學生がやる、それを警察が怪しからぬとか言うて注意をする、自由研究の侵害だとか言うて、また巡査とせり合ひを始めるとかいふ、さういふやうな鹽梅で愚にもつかない用が多くて仕樣がない。

これは何だといふと、この世の中を簡單にすることの必要なことを知らない、簡單にするといふことは面倒だからざッとして置くといふことではない、簡單といふこと

は、紛雜を避けて一ぺんに埒のあくやうにするといふことである、簡單といふことには、必ず必然の條件として透明といふことと徹底といふことがなければならぬ、簡單にするといふことは、世の中は打ッ棄ッておくと複雜なものだ、その複雜なものをば簡單にする、こゝに一人の人があッて、女房を持つと二人になッて、それにまた子供が出來ると三人になッて、それが幾人も子供が出來る、その子供がまた子供をこしらへてゆく、暫く經つとどッさり殖える、そんな鹽梅にだん〳〵世の中が煩雜になる性質のものだから、これを治めるには、その煩雜をもとへ戻して、さうして簡單にするとともに、一目瞭然として底の底まで見えるやうに徹底するといふことが世を治めるといふことである。

學問といふことは、それの方針をさづけるのが學問、『學問の道他なし、放心を求むるに在り』、その心のうか〳〵してゐることをば引緊めて、さうして本元にかへすといふことが學問の目的だ、それをあれやとれやと柄のないところに柄をすげるやう

な、愚にもつかない理窟をむやみに製造して、事件も多くし、議論を複雜にする、それが學問だといまの人は考へてゐる、だから、いまのところでは學問など〻いふものは、殆んど國を亡國に導いてゐるやうなもの、私は天下の學校に於いて、もう文學だの法學だのといふものは廢してもい〻と思ふ、あんなものは廢してしまッてい〻、それよりも、あんなものを學ぶ間に、理學とか化學とかいふやうなものを修めて、機械學とか、飛行機に乘る事とか、鐵砲を撃つ事とか、さういふ實學を研究する、日本の理化學の研究なんといふものは實に幼稚極まッたもので、日本人の發明など〻いふのは、大抵ゴミから瓦斯を起すとか、鰹節をけづる器械ぐらゐのものだ、西洋では日々夜々いろ〳〵な驚くべき事を日に月に發明してゐる、世界の存在を脅威するやうな發明をドン〳〵出してゐる。

むかし、太宰純（春臺）といふ人が九州から出て來て、はじめて荻生徂徠のところへ初對面にいッた、徂徠の高名を聞いて師と仰いで門に入らうといふ、ところが太宰

春臺も九州に於いて聞える學者論客、徂徠は天下に大名をなした大學者、これが初對面だから、さぞ經學の原理を論ずるとか、天下の經濟を論ずるとか、天下の形勢がどうとかいふよほど深いむづかしい堂々たる議論があるのだらうと、太宰春臺の方では意見をかなり作ッて出かけた、さうして徂徠は初めて太宰春臺と會ッた、『私は九州の太宰純といふもの』『ア、私は荻生物右衛門である』と暑いとか寒いとかいふ話がすむ、『時にお國の方はお米が兩にどの位します』、太宰先生知らない、『どうもそれは一寸分りません』、さうすると徂徠が『ア、さうですか、あなたは天下の經濟を論ずるといふことをかつてのお手紙で承りました、お著述でも拜見しましたが、いやしくも天下の經濟を論ずる者が、米の値がいくらであるか知らぬやうな迂濶な事で、生きた世の中の經濟を論ずることは出來ない』といふ事から始まッて、堂々とその孔孟仁義の道もみな世を治めるところの實學であるといふ話をされた、太宰先生、あの傲岸不屈の太宰先生も流石にこれには閉口して、到頭『恐れ入りました』と屈服したとい

ふ、面白い話だ、いきなり片ッ方は今の學者見たやうな空論を操縱して當らうと思ッて來たら、徂徠の方は實地の問題でもッて、國民の實際生活、それを解決するための學問なんだ、米一升いくらするかを知らないで經濟を論ずることはないといふた、或る書物には水の目方を聞いたといふことが書いてある、『あなたの國の水の目方は一升何匁ありますか』と聞いたといふ、これなら尙ほ分らぬ、要するに實地に疎いことをいふたものだ。

ところが今日はその殆んど無用の學問、有害の學問が天下に瀰漫して、學問なり藝術なりが、ともにみな世を日々夜々に障害してゐる、そこで政治は不徹底で混亂してゐる、一人も眞に世を治め國を興すことについて大責任心をもッて、上　天皇の御委托に對し下國民の輿望にそうて國家を背負ッて立たうといふ考へをもッてゐる人がない、さういふ人が寄ッてたかッて政治をとるのだから、これに治められる世の中といふものはどうしても混亂、紛亂、惑亂の中に居らなければならない、人民たる者は迷

惑千萬、ところがその人民も、この紛亂に馴れてゐるから、むしろ紛亂の方が世の中のあたり前だと考へてゐる、さうして靜寂といふやうなことは尊ばない、靜思靜寂といふやうなことを尊ばない、ものを靜かに考へるといふことを尊ばない、文字を使ふのでも活版だから、ちよいと組んでちよいと刷ツてそれで出來る、だから新聞なども大事にしない、讀んでしまふと直ぐあとは豚肉の包紙か何かにしてしまふ、字も掛けながしなら内容も掛けながし、頭に這入るのもかけながしなんだから、ちやんと深く考へない、むかしの書籍は木版で大きく彫るんだ、心からよく讀んで一々燈蕊をひねツたり何かするんだから、多少愼重味をもツて讀む、難かしい字が使ツてあるから考へないでは分らない、考へることがらによツて頭が訓鍊される。

昔の人間は難かしい字をみな讀んで居ツた、併し昔の人間は難かしい字を讀んだために馬鹿になツたといふことはない、それがために何も壽命が短くなツたといふことはない、今日は外國語といふものを學校で課する、高等學校に行けば少くも二つや三

つの外國語を課する、英語だとかドイツ語だとかを、それを何のために學ぶんだといふと、教科書を讀み講義を聽くためだといふ、日本に言葉があるんだから日本の言葉で教へたらいゝ、外國語で教へるとは餘計なことなんだ、そんなに外國語を尊ぶから、それぢや外國語を習熟してゐるかと思ツて、「教育勅語」を英譯と、ドイツ語譯と、ロシヤ語譯と、フランス語譯と、印度語譯と、支那の譯と六ケ國語で飜譯をして、さうして最勝閣の正境寶殿へ掲げようといふので、國家がたてゝゐるその專門の外國語學校だから、そこへ持ツて行ツたらやツてくれるだらうと思ツて、外國語學校へ教育勅語の六ケ國語の飜譯を賴んだ、さうすると出來ないといふ、何故出來ないかといふと、とても今これだけのものをやる力の者がないといふ、或は教師個人の仕事としてならばやるかも知れないといふ、それぢやそれでもいゝがやツて呉れといふたところが、ドイツ譯と英譯は請合ふけれども、あとのは請合へないといふ、英譯なら

文部省の譯でも吾々は少しまだ一寸足りなく思ふ、例へば國體といふ大事なことばでも、文部省の譯したのは『國家の基礎的政情』といふやうな意味に譯してある、それでも今の人の國體の考へよりも多少いゝがまだそれでは足りない、もう少し研究を要すると思ふんだけれども、まアあれが一番いゝ、ところが他はそれ以下なんだ、この外國語學校といふものは、國家がたてゝゐる立派な、堂々たる代表的の外國語教育の淵叢(ふんそう)でありながら、それッぱかりの註文にも應じられないといふほど情ないものなんだ。

それで一般の子供の頭に愚にもつかない外國語をどッさり教へさせて、さうして實際用にはたゝない、たゞ人間が生意氣になッて、西洋のことを少し知ッて、西洋のことをば無茶苦茶に使ふやうな習慣をつけたまでにすぎない、ほんたうに西洋の純粋なる學問も思想も窺ひ知ることは出來ない、まッたくの無駄骨なんだ、さういふ下らない愚にもつかない事のために國民の精氣を消耗することは棚にあげて問はないで、漢

字が千字や五百字減ッて見たところで何の役に立つものであらう、實に馬鹿々々しいことだ、なるたけ難かしい字を覺えさせた方がいゝ、學校が難かしい字を教へるといふ風潮になれば、それはたゞ字が難かしいとばかりでない、難かしい字をおぼえるについては、性情を錬り人間の心を錬る、その心を錬ることから獲得しきたるところの無形の力といふものは實に大したものだ、然るに現代の教育家や當局者はみな見當が違ッてゐる。

まッたく見當が違ッてゐる、天地間萬物何ごとでも如何なる國の言葉でも、上は高尚なる文學哲學より、下は日常生活のことから、用具調度のことに至るまで、あらゆる世界中の使ふ言葉、各國家の典禮語から國民の使用するあらゆる言語を、悉く日本語に飜譯して、さうしてなんでも日本語で判るやうにすればいゝんだ、譯語でもさうだ、てん〳〵われ〳〵、銘々自分勝手に飜譯するから、不徹底な飜譯の言葉が幾らもある、意義をなさない譯語が幾らもある、どれが本當だか何だかわからない、そんな

無責任なことではいけない、そこであらゆる學者智識を集めて最も健全なる譯語であるといふものを決めたならば、これを　陛下に上奏して、勅令による勅定譯語といふものを拵へて發表したらば、その譯は容易に動かさぬものにして、それでどんな事でもだ、世界中のあらゆる細かいつまらぬ事までも、日本語でもッて教授するだけで用が足りてゐるとすれば、二年でも三年でも外國語習得に用ひるところのくだらない努力を止めてしまッて、學問の內容に深く力を注いで行くことが出來れば、よほど日本人は利口になるんだ、そんな鹽梅でみな頓珍漢な、なんといはうか棚下ろしを初めたら際限はないけれども、これは實にものを深く考へるといふことを尊ばないところから來ッた惡弊である、だから論より證據だ、まア私が國體の三綱といふことを頻りに使ふ、明治三十六年以來その精神を主張してゐるが、この頃大分眞似をするものが出來て來たが、大部分の人は一向ぼんやりしてゐる。

日本の國體といふものは皇統連綿萬世一系といふそれでおしまひだと考へてゐる、

それは國體そのものから來ッた結果であッて、國體の原因ではない、萬世一系皇統連綿たるべき本因たる國體がある、それは道なんだ、それを國體といふ、その道は神武天皇によッて主張された、積慶、重暉、養正といふ、この三つの項目、これが日本の建國の大精神である、

「日本書紀」に歷然としてある、それを見て今まで誰も氣がつかない、氣がつかないでゐたのだ、大體學者は　神武天皇はこの國を創めた英雄である、英主であるといふ位な議論である、　神武天皇が偉いといふのは、日本を開いたから偉いといふ、それだけならば、勝てば官軍負ければ賊軍といふのと同じだ、その內容にどういふ貴い事があるかといふ事を論じない、結果はどうだッて構はない、內容が根本だ、結果を論ずれば楠正成なんといふのは大失敗だ、意氣地のない男だ、智慧があるとか忠義の名將だとかいふけれども智慧も餘りないボンクラだ、湊川で討死をしちまッて悲憤の涙を呑んで敢なき往生をとげるなんていふ事は大失敗だ、餘り智慧がない、忠義が徹

底しないと云はれても仕方がない、けれども楠公の精神、誠忠、實に天地を貫いてゐるといふことは萬古に滅しない、だから楠正成の精神そのものは即ち楠公の楠公たる所以だ、成敗の跡から論ずればあの人は失敗だ。

日本の國體の貴い所以は、國體の内容そのものだ、この建國の三綱だ、その建國の三綱を今日まで皆あり〳〵と、鼻面をひッとするやうにちやんと書いてあるのに、誰もこれを知らない、氣がつかないといふ、これは何たる事であるか、『心こゝに在らざれば見れども見えず聞けども聞えず、食らへどもその味はひを知らず』と古人は言うてある、これまで「日本書紀」を讀んだ者が本當に國を思ふといふ心がないから、さういふ大文字にぶッつかッても氣がつかない、食へどもその味を知らず、讀んだらうけれども、讀んでもスラ〳〵讀んでしまふ、讀んでしまッて頭に殘らない、殘らないで日本といふものはどう言ふわけで存在してゐるか知らない、どういふわけで出來たかを考へない、日本の出來た理由を考へないから、日本を他の國に擬がッて考へて

見たり打ッつけたりした。

そこで私は　神武天皇に還れといふ、　神武天皇に還る能はずんば、せめて　神武天皇の再現者たる　明治天皇に還れ、これは畏れながら假令一日でも天皇と同じくこの天を戴き同じ日月を仰いだ因緣深厚なわれ〳〵だ、この大聖人と一日でも天を同じうして生活したわれ〳〵は、じつに幸福な者である、現に見奉ッたこの絶大の聖人たる　明治天皇は　神武天皇の再現者だ、　神武天皇の御再來ともいふべき方だ、一遍明治天皇に集まれば、やがて　神武天皇に還る即ち　神武天皇の開いた國は　神武天皇の國だ、われ〳〵は　神武天皇の部下だ、　神武天皇の精神を以ッて精神とする神武天皇は御自分の御先祖をば乃神乃聖と仰しやッた、いはゆる種姓尊高だ、これは「王法正論經」にある、釋迦如來の國王觀は實に周到綿密に日本の國體を說いたやうに出來てゐる、それで憲法の發布せられた當時、私は蠣殼町の立正閣で帝國憲法を講じたとき、王法正論經を以ッて一々憲法に當てゝ講義した、種姓尊高、生れが途中

から出て來て急に後からくッつけたものとは違ッて先天に尊い、それで　神武天皇の御宣言にも乃神乃聖と仰しやッた、その乃神乃聖がたゞ徒らに拜み奉ッてお厨子の中に入れてあるところの神聖味と違ッて、實際にそれだけの仕事をなされた、これは佛教で申せば功德莊嚴といふ、功德を集めてその功德をもッて身を飾ッたといふ、功德莊嚴の神聖味だ、實際に功用をあらはした、それが三綱だ。

われ〳〵國民も即ちその三綱に則ッた至公至正の國體を體し、聖訓を體してゆかなければならぬ、それが日本國民の本領だ、それがすんで、その一拶が一切と〻のッての上で後の事はみなする、肝腎なことを捨て〻置いて、その他のことを求めて、金が欲しいの、妾が欲しいの、別莊が欲しいの、議員になりたいの、芝居が觀たいの、そんな事は第二第三、まづ國民としての本領は第一に立てなければならぬ、立てさせるのが教育なんだ、政治なんだ、その政治もそれを立てさせようとせぬ、教育もそれを導かうとしない、しかしその割合にはよくこの國は保ッてゐると私は思ふ。

いま私の觀察によれば、もう日本といふ國はロシヤ以上に紊れてしまッて居らなければならぬ、然るにそこまでにいかないのは、何か仔細がある、　皇祖　皇宗の威靈だ、それが心こゝにあらざれば食らへどもその味はひを知らず、分らぬ、『顚倒の衆生をして近しと雖も而も見ざらしむ』といふのはそこだ、これはものをよく考へない證據だ、ものをよく考へるといふことは大變必要だ、むかし前行七歩後行七歩といふ智慧を賣らうといッて賣ッて歩いたといふ話がある、『智慧を賣らう智慧を賣らう』と賣ッて歩いてゐると、『智慧を賣らうといふのはどんなものだ、買はう』と呼んだ、『その智慧は幾らだ』『幾ら〳〵』これは安いも高いも相場がないからいひなりに買ッた、『どういふものだ』『代金を先きに頂きませう』『どうも品物を受取ッてから』『品物を受取ッてからというて、品物を渡してしまへば逃げられてしまふから、金を先きに貰はなければならぬ』といふ、そこで金を渡すと『前行七歩後行七歩、中央考』とれだけ教へた、前行七歩といふのは、前へ七足歩いて、後行七歩といへば、後へ七足、そ

れから眞中に立停まッて考へる、これだけなんだ、『これで百兩は高いよ』『變なことを敎へるやうだけれども、何事にぶッつかッても、それをやれ、それが智慧だ』といふ、變なことをいふが仕方がない、代金を拂ッてしまッたから仕方がない、ところが何か事件があッたなら、智慧が買ッてあるからやッて見ようと思ッて、それから時々これをやる、さすがに何かちよッと考へがつく、なるほど、まだどうもマザ〳〵と効がわからないけれども、滿更これは嘘ではないらしい、はッきりどんな智慧といふことは出て來ないがと半信半疑、それから旅行をした、旅行をして暫くして家へ歸ッた。

久し振りに故郷へ歸ッて我家まぢかくなるといふと夜だ、定めし女房や子供が待ッてるだらう、年を取ッた母親も肉親であるからさぞ待ッて居るだらうと思ッて、まア喜び勇んで我家へ歸ッた、すると我家近くなッて窓から灯かげが射してゐる、懷しさの餘りに、内を遠くから覗いて見ると、窓へ灯りがさしてそれに人影が映ッてゐる、その人影を見るといふと、一人の女、どうも影の樣子ではわが女房、それと相對して

居るのがどうも男だ、あたり前の男だ、對ひ合ッて睦まじさうに話をしてゐる、ハテナとれは長らく俺が旅行して居ッた留守に嫁め、何か男でもとしらへたか、怪しからぬ、良人の留守にどうも夜陰に及んで男女相對して睦まじく話をしてゐるといふことは、これは怪しからぬ、ムラ〳〵と怒り心頭に發しておのれやれと一刀の柄に手をかけて飛び込まうとした。

その時、何事でも前行七歩後行七歩を用ひよといふのだから、オ、ヒ〳〵で一つやッて見ようと、そこで前行七歩後行七歩、怒りを鎭めて考へるといふと、その二人の話をしてゐるのがどちらも女の聲だ、おや奇態だ、女の聲のやうな男なのか知らんと思つて、一つ疑問が起ッた、初めの考へは男の姿が映ッたから、といつは姦夫を作ッたんだらうとかう思ッた、だから直ぐ飛び込んで一刀の下に斬り殺さうといふやうな風に考へたんだけれども、とりや不思議だといふので、斬るだけは止めになッて疑問の方が先きになッた、さうすると疑問が起ると疑問を解決しようといふ事になる、そ

こで拔足差足して窓の側に寄ッてよく聞いて見ると、その聲音がどうも我が母に似てゐる、それにしても妙だ、男の形が映ッたからと思ッて、今度はまア仕樣がないから這入ッて、實際にぶッつかッて樣子を見ようと『今歸ッたよ』といふ、さうすると家ぢや飛び立つやうに喜んで、『まアお歸りなさい』というて妻君も迎へにくる、子供も喜び、おふくろも喜ぶ、ヒョイト見ると、おふくろが男の髷をかぶつてゐる、『お母さんこれは何んです』『どうもこの頃は物騷で銀座通りさへ泥棒が出る世の中だから强盜などゝいふものが出てくる、女ばかりだと思ふと物騷でいけないから、夜になるとわざ〳〵私が男の髮をかぶッて、こゝには男がゐるといふことを示すために、これをしたので、これは家を守る秘訣である』というておふくろが話をした、さて成程やうやく判ッたが、おふくろを斬るか女房を斬るかする、斬らないまでも一つの大騷動を起すところであッた、それを例の二三年前に買ッてあッた徽のはえた智慧を引張り出して、前行七歩後行七歩をやッたお蔭で、危機を漸く脫したといふ、矢ッ張り智慧

だ、安いものだというて、後で感心したといふ話が支那の稗史にある。

それはものを考へて見る、今日のやうな新聞だの雜誌だの、相當な人が相當な事を書いてあるのだらうけれども、「中央公論」だとか、「改造」だとか、「現代」だとか、「キング」だとか、いろ〳〵なものが出てくる、それから婦人雜誌なんといふものが馬鹿に幅をきかしてゐる、「婦人の友」とか、「婦人倶樂部」、「主婦の友」とか婦人何とか、それも一々玄關附でもッて婦人の何とか號、結婚何とか號、煩悶解決號と、いろ〳〵な名をつけて、さうして大きな活字で廣告する、あれは嬶天下の相だ、あんな大きな活字でそゝらなければならぬほど世の中に用があるかと思ふと、さうではない、見ると碌でもないことが書いてあッて、それ程の大きな活字で鼓吹する程に睨みのきくやうなものではないんだが、賣らんがために大きくしなければならない、活動寫眞の廣告のやうな鹽梅にやらなければならぬ、それで釣られて買ッて見ると、用の多いのに餘計なものを一冊も讀む、迷惑千萬な話だ、どれか一つで用の足りるやうな

奴で同じやうなものがドツサリあるといふんだから、なか〳〵一つづゝ昔の儒教や釋教の經典を讀誦し解釋するやうな鹽梅に、思ひを潛めて精義神に入るといふやうに讀んではゐられない、あれを一々「改造」だの「中央公論」だの「主婦の友」だのを精義神に入るやうに讀んで居ッた日には、それで夜が明けてしまふ、だからつひザツと讀んでしまふ。

第十七講

私ども新聞を讀むのに自分に關係のない、世の中に關係のないことはかつて讀まない、大體天下の大勢として知らなければならぬ事は讀む、新聞は十以上の新聞を讀むけれども、十か十五の新聞を讀んで實際勘定すると、新聞一枚位な見當にしか當らない、たいていは樞要な記事はどこの新聞にもみなあるから、その外はみな下らぬことが多い、さういふ風に儉約しなければ正直に一々讀んでゐては追ッつかぬ。

雜誌などいふものに至ッてはなほのこと、小說であるとかいろ〳〵なものがあるからどうも徹底して讀むなんてことはやッてゐられない、讀んでゐられないから見てし

まへば、丸めて反古にするといふ、だからまア瞬間の後はその貴重な文字はもう反古になる、反古といふ豫約をもッて讀む、その過去を論ずれば、何も天下のためこれを書かなければならぬ、世の中のためこれだけのことを知らなければならぬといふ必要から生れた文字ではない、本旨はそれを書いて原稿料をとるためだ、まア文章を製造するんだが、御家人が內職に楊子を削る樣な工合にやッて、これを持ッて行ッて幾らに買ッてくれといふので、原稿を賣ッて歸りにビールを飲むといふことのためにする

第十七講

んだから、過去を論ずれば原稿料、未來を論ずれば反古といふ運命にあるものだ、だからこれは魂を入れて讀まないわけだ、さう云ふことに馴らされて了ッてゐる無關心な人間には、靜思といふもの、靜かに考へるといふことがない、考へるといふことがないからいろ〳〵なさうした缺點がくる。

さま〴〵にもの思ふ夜もさやかなる月にむかへばなぐさまれけり

このいろ〳〵の煩悶紛雜した思ひも、いま靜かにそれの收束を考へ、まとまりを考

へるといふ時に、天上に冴えわたッた月、一點の曇りのない冴えわたッた月に對した場合に、はじめて自分の煩悶紛雜を超越した一ッの靜寂の境涯になるといふ、月は卽ち清寂、人の處世の一番の必要は靜思である、乃木大將は熟慮斷行といふことを言うた、しかし熟慮といふ前に靜思がなければならぬ、靜思から來た熟慮でなければならぬ、たゞものを繰返して考へたからといふだけではよくない、靜かに自分の放散してゐる心をば自分のもとへ引寄せ、さうして心を落着けて考へて、まア來し方から行末を思ふとか、或ひは深き道に對して考へるとか、或ひは古人の金言に引比べて考へるとか、自分の信仰する敎の上から照して考へるとか、いろ〳〵な散亂してゐるものを收束する、まとめるといふ、何にしても靜思だ、靜かにものを思ふ、これがなければならぬ、この靜思といふことは靜寂な境涯にあッた時が一番いゝ、靜寂な境涯といふのは多くは夜だ、夜の月だ、靜寂なる月、さやかなる月といへば、雲のない冴えわたッた月、もろ〳〵の障碍を拂ッた幽寂なる月だから、その月に對する時に初めていろ

いろなモヤ〳〵した煩悶や疑惑といふ樣なもの、或ひは憂ひといふやうなものが、對境のさやかなる月のために取去られて、自分の憂ひが直ちになぐさめられる。

これはたゞ月を見たから月を通してくるといふわけではない、これは同情です、さやかなる月、靜寂といふものに自分が同化しなければならぬ、同化する前には同情といふものがいる、およそ詩は皆この同情の結晶だ、月に對し花に對し何事に對しても同情といふ心をば詩の形式であらはす、天地間のことはこの同情といふことがなければ、そのものが自分のものになり來たらない、同情が融合の楔(くさび)となる、技藝でも何でもさうだ、同情といふことが本となッてその技が達する、馬に乘ッても馬に對する同情といふものが徹底して技術の上にあらはれるから、馬がいふことを聽く、鞍上人なく鞍下馬なし、それが同情だ、馬の方ではおれの身體に人間が乘ッてるとは思はない、やはり自分のからだと思ッてゐるほどになる、人間の方ではおれの體の下に馬がゐるとは思はない、自分の身體があれだけ伸びたんだと思ふほど、一心同體になるといふ

ことがなければならぬ、馬に乗る人は馬を大層可愛がる。

何事でもさうだ、商人が商賣するたッてやはり自分の業務そのものに對する同情がなければならぬ、その同情によッて徹底して、それがわがものとなり得るほどの融合が生じてくる、さやかなる月に對して我が心がなぐさまれるといふことは、このさやかなる月、卽ち一點の曇りのない淸淨透徹の月といふ天上の中の偉大なる一つの現象といふものによッて自分の心をば透射される、卽ちこれに沒入する、月は天體の一つだ、天に對する同情だ、天といふものは際涯のない廣いものである、それに同情する時に無限大の廣いものになる。

第十七篇

あさみどり澄みわたりたる大空の廣きをおのが心ともがな

といふ御製がある、これは大空の限りなく廣いさういふ無限大の心でなくてはいかぬといふ、天上の中の最も顯著なるものは日だ、日は最も壯快なるもの、よく照すものさしのぼる朝日のごとくさわやかにもたまほしきは心なりけり

と仰せられた、公明正大にして萬物を照す壯快無比なることは天の日の如く、廣大無際限なることは大空の如くとのたまふた。

意味は同じだけれども、月となるといふと月はやさしい、『月見ればちゞに物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど』といふ程の、人にもの思ひを增さしめてしかもそれを收拾して成果するといふ働きを月はもッてゐる、そのさやかなる月によッてあゝあの通りさやかに冴えわたッた自分の心になれば、種々さま〴〵の煩悶や懊惱によッて心を紊すといふことがない、そのさやかなる月に向ッては、我が心がなぐさまれるといふことは、そのさやかなる月、その靜寂なるところの月の境涯に自分の身を沒入して、これに同化することだ、卽ち明徹安心することがなぐさむることになる。

それは天と一如するにある、たゞ日と月との違ひであッて何れも義理は同じこと、もし强ひて分ければ、日は佛法の慈悲の上でいふと慈にあたる、正義だ、日の德は正義だ、卽ち大慈大悲の中の慈だ、月は同情性を持ッたものだから、慈悲の中の悲だ、

第十七篇

それは人情、正しい情だ、正情だ、正義は骨である、人情は肉である、肉はどこまでも優しい潤ひがなければならぬ、骨はしッかりして居なければならぬ、人間はたゞ情愛ばかりでもいけず、理窟でもいけぬ、正義であると同時にその正義を運用するところの情が正義と合體して居らなければならぬ、愛情と理と、この情理が兼ね備はるといふことが、初めて人間の愛を完全に成立することだ、佛法では慈悲といふ、慈は父の如く、悲は母の如しで、父のことは慈父といひ、母のことは悲母といふ。

慈は眞理に對する同情、悲はその物に對する物的同情、たとへていふと慈は樂を與へること、悲は苦しみを拔くこと、かうなると慈と悲と二つ、即ち境涯に同情する悲と、眞理に同情する慈と、この二つが完全に發達したのが眞の菩薩の慈悲で、いはゆるそれは大成した愛だ、今のいはゆる流行の愛などゝいふのは、そんな氣のきいたものではない、流行の愛といふものは、猫のさかり見たやうなもので、自分が感情的に氣に入れば、それを愛するとかういふ、しからずんば、たゞ人類愛とか、宇宙愛と

か、漠然たることをいふ、そんな人類愛とか宇宙愛とか、そんなことでは駄目だ。

佛法の方の慈悲は、生緣の慈悲と法緣の慈悲と無緣の慈悲と、かうあッて、必ず眞理からなりたつし、あらゆるものが眞理と同體、眞理といふものゝ上から救ひとるといふ事が慈悲の結着であると、かういふ睨みからやッて行く、あらゆるものを眞理化し、あらゆるものを正義化して、初めてその慈悲は大成するものである、間違ッたものを世の中に許さない、狂ッたものを許さない、正しい物ばかり存在が認められる、それから得た安心、それから得た安穩安樂は徹底した安穩安樂で、あと戻りをしない眞の常寂光土の我此土安穩天人常充滿といふ安樂の境涯になる、これが佛敎の愛だ、慈悲だ。

いま天に向ッてこの月の冴えわたッたといふ、一點雲のない誠に潤ひのある月は、笑ッてゐるか泣いてゐるかといふと、笑ッてもゐるし、泣いてもゐる、笑ッてゐるといふ時には物を愛して笑ッてゐるし、泣いてゐるといふ時には物に同情して泣いてゐ

るやうな、何ともいへない潤ひのあるものが、月の象徴だ、それが冴え渡ツたといふ時、人間の心は思はずこれに同化して、その月を通しての天と一致した場合には、もろ〳〵の煩悶も懊惱も消滅して眞の靜寂無限の境涯に入る、一たびかういふ物を靜思する狀態にあツて、いろ〳〵紛亂の心ばへを離れて世に臨まなければいけない、紛亂を認めて、たゞそれを繰返し重ねて居ツては、紛亂に次ぐに紛亂を以ツてするから、止度なく世は紊れてしまふ、かういふ意味の御教訓がふくまれて

第十七講

さま〳〵にもの思ふ夜もさやかなる月にむかへばなぐさまれけり

即ち天と心を一つにするといふ靜思狀態に入らなければ、紛亂の八重にかさなツてゐる人生の處置は出來ないぞ、といふ御教訓をふくませられたものと斯樣に解釋し奉るのである。

（第十七講了）

昭和十五年八月卅一日印刷
昭和十五年九月十日發行

明治天皇御製講座　第九卷
定價參拾錢

明治會叢書
9

著者　田中智學
發行者　東京市江戸川區一之江申孝園　安中昌信
印刷者　東京市江戸川區一之江申孝園　横山定一

大日本印刷株式會社印刷

發行所　東京市江戸川區一之江申孝園　明治會本部
電話江戸川一九番
振替東京三六九九八番

404
101

終